ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE

AJPS Magazine 2008-2009

特集❶

TOKYO 2016

Vol. 26

東京オリンピック・パラリンピック招致活動に迫る

河野一郎事務総長インタビュー

特集❷ FLASH BACK BEIJING 2008

北京オリンピック・パラリンピック

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE
日本スポーツプレス協会

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE
AJPS Magazine 2008-2009
Vol. 26

CONTENTS

3 AJPS AWARD 2008 北島康介

4 特集1 TOKYO 2016
TOKYO 2016の青写真
東京オリンピック・パラリンピック招致委員会 事務総長
河野一郎氏インタビュー
「世界中の人々を結び
日本の過去と未来をつなぐ
オリンピック開催を目指して」

12 特集2 FLASH BACK BEIJING 2008
北京オリンピック・パラリンピック
北京五輪総括 12／ソフトボール 16
女子サッカー・フェンシング 18／体操・陸上 19
男子サッカー・野球 20／男子柔道・女子マラソン 21
コラム 22, 23／パラリンピック 26

28 2009 主要スポーツカレンダー

32 AJPS 分科会レポート
陸上競技 32／バレーボール 33／バスケットボール 34
ラグビー 35／体操 36／サッカー 37／自転車競技 38
ゴルフ 39／モータースポーツ 40／スキー 41／スケート 42
コラム 43

45 AJPS ホームページ紹介

表紙は語る

1年後、最高の笑顔に出会いたい！

撮影＆文／菅原正治　Photo&Text：MASAHARU SUGAWARA

デビューから瞬く間に、トップスケーターに駆け上がった浅田真央。バンクーバー冬季オリンピックに向けて、期待の星でもある。

前回のトリノ・オリンピックは、年齢制限の為に涙を呑んだ。そんな思いを胸に日々進化し続けている。

現在、彼女は名コーチのタラソワに付き、より高度な演目に取り組んでいる。ファインダー越しに見る今シーズンの彼女には、笑顔が少ない。プログラムがシリアスな内容だけに致し方無いと思う。難易度の高いジャンプを飛ぶ為に、集中しているのかもしれない。

そんな浅田だが、競技会後のエキジビションでの演技はリラックスしているのか、やはり笑顔が多い。彼女の笑顔は、見る人に元気を与えてくれる。

バンクーバーまで1年を切った。オリンピックという最高の舞台で浅田真央の輝く笑顔を撮りたい。そう思いながら、私はシャッターを押し続けている。

『AJPSマガジン』の発行に寄せて

日本スポーツプレス協会 会長 水谷章人

日本スポーツプレス協会はフォトグラファーとジャーナリストを合わせ、現在では会員数が 149 余名ほどになった。フォトグラファーとジャーナリスト相互が両輪となり、切磋琢磨している。2008 年度は前年に選挙制度を改正し、選挙がなされ新しい役員のもとスタートを切った。

今年度も会員たちの声から理事会で協議策定し、いろいろな事業が遂行されている。この協会誌もリニューアルし、『AJPSマガジン』として、発行するようになった。今後はさらに充実したものを、お手元に届けられるようにしていきたいと考えている。

また、以前より会員の積極性を期待して活動を支援するとともに、協会の存在を社会にアピールするための基金が予算計上されていたが、初めてこの援助金による写真展がキヤノンギャラリーにて開催された。ホームページもアクセスが増え、一つひとつ積み重ねていくことは喜ばしいことだ。また、協会の活動をより活発に展開していくため、すべての会員参加を目標に国内部会の再編成を行った。会員同士の交流により相互の繋がりを深めて一体感を強化し、実績の充実を図り、対社会的信用を確たるものにしていきたい。また、我々の地位の確立のためにも、将来的に協会を一般社団法人化することも、会員の声を聞きながら検討していきたい。

最後になりましたが、賛助会員、競技団体、多くの皆様方に支えられ、日本スポーツプレス協会が成り立っています。今後ともご理解、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

AJPS AWARD 2008

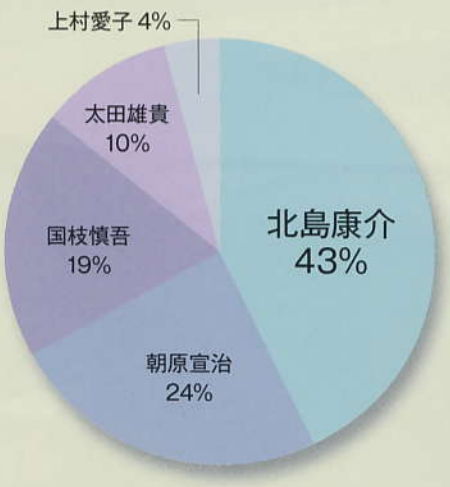
第２回を迎えた「AJPS AWARD」は５名のエントリー（朝原宣治選手／陸上・上村愛子選手／スキー ・ 太田雄貴選手／フェンシング ・ 北島康介選手／競泳・国枝慎吾選手／車いすテニス）を対象に、会員及び賛助会員による投票とAJPS AWARD 選定委員会（委員長･水谷章人）による協議を経て「北島康介選手」に決定いたしました。

北島康介

《受賞理由》

2004 年アテネオリンピック、2008 年北京オリンピック 100m 平泳ぎ、200m 平泳ぎで金メダルを獲得。五輪にて 2 種目 2 連覇の偉業を達成した。また、400m メドレーリレーもアテネオリンピックに続き銅メダルを獲得。北京オリンピックでの 100m 平泳ぎ 58 秒 91 は世界新記録。200m も大会新での金メダルだった。このように有言実行をする姿と常に進化し続けるアスリートとしての姿が印象的だった。

《投票結果》（投票数に対するパーセント）



《過去の受賞者》 AJPS AWARD 2007
浦和レッドダイヤモンズ

特集1

TOKYO 2016

東京オリンピック・パラリンピ

晴海に新設されるオリンピックスタジアム（10万人収容）

の青写真

ック招致活動に迫る

東京オリンピック・パラリンピック
招致委員会事務総長

河野一郎
インタビュー

インタビュー&文／小永吉陽子
Text : YOKO KONAGAYOSHI

写真／藤田真郷
Photo : MASATO FUJITA

世界中の人々を結び
日本の過去と未来をつなぐ
オリンピック開催を目指して

「東京」「マドリード」「シカゴ」「リオデジャネイロ」――4都市に絞られた2016年の夏季オリンピック・パラリンピック候補地。 はたして、東京は開催実現となるのか。河野一郎東京オリンピック・パラリンピック招致委員会事務総長のインタビューと、開催概要をもとに「TOKYO 2016」の全貌に迫る。

河野一郎 Dr. ICHIRO KONO
東京オリンピック・パラリンピック招致委員会事務総長

1946 年、神奈川出身。日本オリンピック委員会理事、筑波大学教授。日本のスポーツ医科学の第一人者であり、医学博士という多彩な顔を持つ。ラグビー選手として活躍後にレフェリーの経験を積み、1999 年のラグビーワールドカップでは、日本代表の団長と強化推進本部長を兼任。世界アンチ・ドーピング機構（WADA）の委員でもあり、1988 年ソウル大会以来、すべてのオリンピックに参加。政府関連では、新しい「スポーツ振興基本法」の策定推進にかかわるなど、国家レベルの取り組みにも貢献している。2006 年東京オリンピック招致委員会事務総長に就任。

東京だから実現する世界一コンパクトな五輪

戦後からわずか19年後の1964年。日本で初となる東京で開催されたオリンピックは、復興を遂げた大都市の姿を世界にアピールし、国民に大きな感動と自信を与えた。東京オリンピックを契機に、日本は高度成長期の中で驚くべき発展を遂げたことは誰もが知るところだろう。21世紀を「環境の世紀」にすると掲げている東京が、1964年から半世紀後の2016年に再び夏季オリンピック開催地に立候補した。

2度目の東京開催といっても、コンセプトはまったく新しいもの。1964年の東京が敗戦の焦土跡にたくさんの施設を建てた「開発型」ならば、2016年は日本の経済や社会、人々の希望を再生し、日本を元気にする「再生型」だと招致委員会はアピールする。2009年2月12日、東京オリンピック・パラリンピックの開催計画である立候補ファイル（※1）をIOCに提出。いよいよ、本格的な招致活動へと踏み出した。

● ● ● ● ●

――今年の2月12日にIOCに立候補ファイルを提出し、招致活動の本番を迎えましたが、改めまして、2016 年東京にオリンピックを招致する意義を教えてください。

河野　都知事である石原慎太郎招致委員会会長は「近年の日本には閉塞感がある。そんな中でオリンピック・パラリンピックを開催することによって、開催している時期だけでなく、その前もその後も、色々なレガシー（遺産）が残っていく。世代が変わりながらも、都市にレガシーをつないでいく大きなきっかけにしたい」と言っています。私自身も都知事の言葉に同感していますし、このことが東京デオリンピックを開催する動機でしょう。

世代と世代を結ぶきっかけ作りがオリンピック開催の動機だとすれば、現在のオリンピック、あるいはスポーツが抱えている色々な課題を解決したり、答えを出すことにもつながる大きな期待があります。それだけでなく、世界の「都市」が抱える課題の答えを示す場にもなりうるのです。

――日本の中で、真っ向勝負で首都・東京を開催都市に選んだ理由は何でしょうか？

河野　現代社会の中でなぜ閉塞感があるかというと、現代社会の環境が変わってきていることがあげられます。国連機関が「21 世紀は都市の時代になる」と言っている中で、東京のような世界で最も成熟した都市で、しっかりと準備をして素晴らしいオリンピックを開催することによって、現代の都市が抱えている問題についても様々な角度から解決モデルを生み出すことができるのではないでしょうか。スポーツは、人や都市、世界平和に対して貢献することができる。そこに大きな意味があるのです。そのために我々は最高の舞台を作る努力をしています。

開催地を東京に選んだプロセスとしては、東京と福岡という 2 つの都市が手を挙げた中でどちらが招致に勝てる可能性が高いかという点で JOC が東京を選んだのです。最近のオリンピック・パラリンピックは都市でやると言いつつも、実際には都市の郊外にスタジアムを作って開催されることが多くなっています。やはり、オリンピックの原点に帰って、人々が集まる中で開催しようというムードがオリンピック・パラリンピック関係者の中では高まっています。それを日本、そして東京ならば可能にできる。東京には組織力もあるし、道路や施設、通信状態といったインフラも整っている。オリンピック・パラリンピックを開催するための土台がすべて揃っていることが都市開催を可能にできると思っています。たとえば、治安が悪ければ街の真ん中、人々の真ん中で大会を行うことはできません。色々な条件ひとつとっても東京にはすべてが整っているので、都市の真ん中でやることが可能になるのです。

――東京が計画しているのは、半径 8km 以内に主要施設が揃っているコンパクトな開催（射撃とサッカーを除く）。これが実現すれば、今までとは違った都市型オリンピックが実現しますね。

河野　東京は世界一コンパクトなオリンピック・パラリンピックを目指しているのです。都心の真ん中 8km の中に、64 年東京オリンピックの遺産（ヘリテッジゾーン）と、未来の都市環境モデル（東京ベイゾーン）があり、この 2 つを結ぶ位置に、オリンピックスタジアム、選手村、IBC と MPC（国際プロードキャスティングセンター、メインプレスセンター）の主要 3 施設を配置します。オリンピックスタジアムと選手村の距離はわずか 2 ㎞、アスリートは 20 分以内で（射撃とサッカーを除く）すべての会場に移動することができます。

オリンピック・パラリンピックは競技だけではなく、国際親善の場でもあります。我々もオリンピックに出向いた時に、開催国の人や世界各国の人と接触して国際交流に貢献しようとしますが、地理的になかなか難しいことがあります。極端なことを言えば、日本の空港を出て、現地の空港に入って、選手村に入って、競技会場まで行って、選手村に戻って、その往復だけだったといったように、競技だけやっ

TOKYO2016のスローガンは「結び」
—— Uniting Our Worlds ——

て日本に戻って来たなんてことも少なくない。それでは、オリンピックの素晴らしさは分からずじまい。いわばオリンピック・パラリンピックの主役である選手たちが、競技だけを行って、開催地から帰ってきてしまうのはアンバランスだと思うのです。

東京が都市の真ん中でやることは、選手だけじゃなくて、関係者や観客や観光客など、東京を訪れるすべての人に、本当のオリンピック・パラリンピックの良さを体現してもらうことになります。オリンピック・パラリンピックが開催されている都市の良さを感じられることは、素晴らしいことではないでしょうか。

——これまでに、都市で開催して印象に残っているオリンピックはありますか？

河野　個人的な経験でいうと、バルセロナ・オリンピック（92年）は良かったですね。場所的には少し海寄りでしたが、都市の真ん中で開催していて、選手村も街の中心地のそばにありました。サグラダ・ファミリアをはじめとした教会や建造物、美術館も同じ街の中にあったので、選手でも気軽に見学しに行くことができて、非常にいい記憶を持っている人が多いと思います。

スポーツの素晴らしさは「人と人を結びつける」ところ。それもただ結びつけるのではなくて、化学反応させること。単なる人と人の出会いではなく、出会いが次に結びついていくところにあります。これこそが、スポーツには力があると言われる原点だと思います。たとえば、1回試合をしただけで人と人の距離はずいぶんと近くなりますし、交流が進みますからね。スポーツの力というのは、まさに東京オリンピックのスローガンである「Uniting Our Worlds」つまり「世界中の人と人を結びつける」ことができるのです。

したがって我々の望みとしては、世界中から来ていただくアスリート、大会役員や関係者、観客など世界中の人々が日本の大都市・東京の中で会っていただいて、化学反応を起こして、いい方向に進んでいってくれればいいと願っています。

日本には人をお迎えするとき「おもてなし」という言葉があるように、お客さんが帰るときにいい思い出を持ち帰ってほしい文化がありますから。そういった意味では、これから開催までの7年間にプロセスを踏むことは、おもてなしの準備をするといった、非常にいい経験を積むチャンスになりますね。

人と人、過去と未来、世代を超えて世界中を結ぶ

——先ほど、お話に出てきた東京オリンピック・パラリンピックのスローガン「世界中の人と人を結ぶ」ことについて、詳しく聞かせていただけますか。

河野　1964年の東京オリンピックは日本にとって非常に大きなインパクトがありました。今でも目に見える形で、新幹線や首都高速、国立代々木競技場などが残っていて、これらを目に見えるレガシーと呼んでいます。ハード面のみならず、独特な曲線を描く国立代々木競技場は、日本人がデザインして世界中で認められ、はじめて日本人が外国に向かって目を開けることができた遺産です。そういった要素が直接的ではないにしても日本人の確かな自信につながっていて、日本が発展したひとつの理由になっていると思います。そういった意味では、1964年の東京オリンピックは目に見えるものと、目に見えないレガシーが残りました。

ただ、1964年から約半世紀経った今、両方のレガシーもこのままにしておくと、消えていってしまいます。1964年を知らない世代も多くなった今、スポーツの持つ力を利用して、過去のレガシーを未来のレガシーへと結び付けたいというのが、私たちの考えにあります。過去と未来を結ぶのが我々の活動なので、スローガンとして「Uniting Our Worlds＝結び」という言葉を使っているんですね。

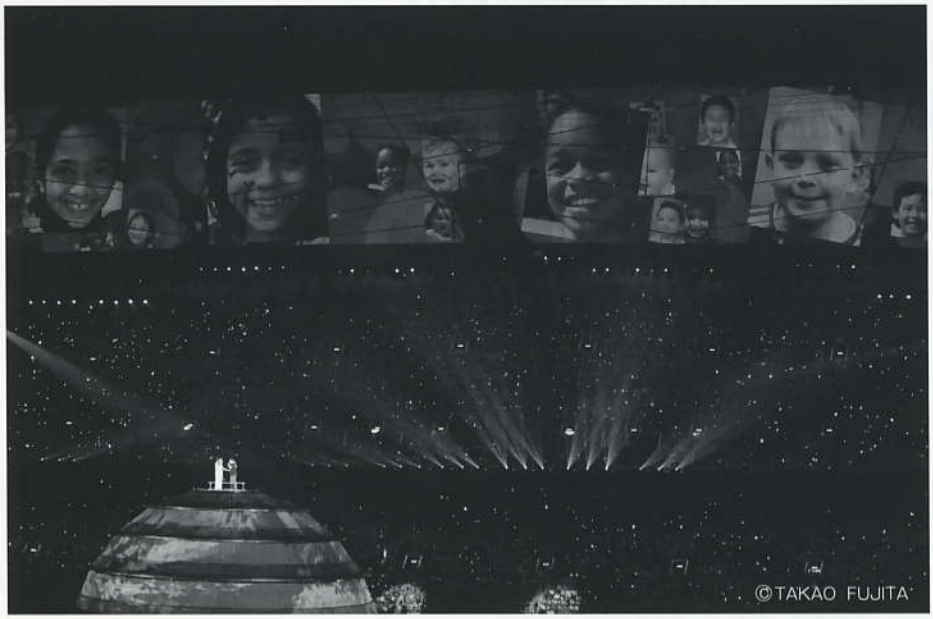
日本に限らず、国の成り立ちというのは、世代を超えていいものを引き継いでいくということにあると思うんです。オリンピックという切り口でいえば、1964年東京オリンピックの前、最中、その後を経験した世代と、まったく知らない若い世代を結びつける。

しかも、1964年を経験した人と今の世代の人を結びつけるだけじゃなくて、そのレガシーの中で生きていくこれから50年先の世代をも結びつけることになる。今これを結んでおけば、世紀や世代を超えて、どんどんつないでいく結びになるのです。

——立候補ファイルを読みますと、「結び」にはいろいろな要素があって、「世界中の人と人」「過去と未来」の結びのほかにも、「陸と水」「人と自然」を結ぶというものもあります。これらはどんな結びなのでしょうか。

河野　東京という街の成り立ちは、皇居を中心として広がっています。伝統ある「ヘリテッジゾーン」のレガシーを、埋立地を中心としたこれからの未来へ向かう「東京ベイゾーン」と結びつけるのです（P10地図参照）。オリンピックスタジアムは、ヘリテッジゾーンと東京ベイゾーンの交わるところに置き、海を含めた東京湾をステージに見立てています。この地域を「結びクラスター」（P25参照）と呼び、まさに、東京の街から未来に向かった構図になるんですよ。これは水と陸、過去と未来を結びつけることになりますよね。意外にも東京に海があることを知らない人が多いので、ここでしっかりと、陸と水の都をアピールしたいですね。

2月13日、東京オリンピック・パラリンピック招致委員会が立候補ファイルを発表。左より谷川健次副会長、室伏広治理事、竹田恆和副会長、石原慎太郎会長、小谷実可子理事、河野一郎事務総長。日本らしさを出すために、立候補ファイルは和綴じのもので、結びのエンブレムをモチーフとした風呂敷に包まれて提出された



オリンピックは過去と未来をつなぎ、子どもたちの将来に夢を与える（2008年北京大会開会式より）

――今回の東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムはリボンを結んでいるものですが、これも「結び」の意味からきているものなのでしょうか。

河野　ロゴマークは「水引」（みずひき）をモチーフにしています。水引は日本では古来より、結婚式やおめでたい出発という意味で使われることが多い。ロゴマークをよく見ると、結んではいるけど、ほどけるようになっている。水引には一度で終わるという意味の「結び切り」と、何度やっても良いという意味の「蝶結び」（花結び）があります。東京オリンピックの結びは、しっかりと結ぶんだけれども、何度やってもいいという結び。つまり、オリンピックを何度も開催してもいいということ。先ほども話したように、オリンピックには人と人を結びつけることが考えの根底にありますし、とても日本らしいと思いますね。

東京が目指すのは緑と人間と地球の共存

――石原都知事は常々環境問題に正面から取り組み、「環境先進都市」を目指すと宣言しています。オリンピックを開催するにあたり、環境問題をどのように考えていますか？

河野　大会コンセプトとして「世界最高の環境でヒーローたちのひのき舞台を用意する」を掲げていますが、これはまさに環境問題のことを指しています。歴史的に見ると、過去のオリンピックは常にサバイバルでした。戦争であったり、財政問題であったり、それを乗り越えてオリンピックは続いています。1964年の東京オリンピックを含めて、開発型のオリンピックが続いたことで近年、オリンピックがサバイバルしなくてはならない問題としての環境問題がたちふさがり、IOCも14～15年前くらいから環境委員会を作って取り組んでいるわけです。

東京は関東近県を含めれば3000万都市。世界一の大都市です。東京は20世紀最大の大都市であるがゆえに、開発優先という過去があって、公害問題を含めて、世界の都市の中で最も開発型都市の不都合に遭遇してきました。東京と日本は不都合に対してもがき、歩みながら色々な解決策を見つけてきたのです。それが今の東京の環境に関する高い技術力につながっていると思います。東京はもがいてきた経験から知恵を出し、その成果をオリンピックの時にご覧いただいて、地球に貢献したいと考えております。

たとえば東京には夢の島があります。埋立地をあれだけの緑に変え、生活をしているところは地球上にそうはない。さらにそれを広げる「海の森プロジェクト」（※2）があり、こんなことを計画的にやっている都市は、歴史的に見てもそうはないでしょう。先ほども言いました水と陸の結びという意味も含め、東京という大都市が海と緑の都市に再生できることを、オリンピック開催を機会に世界の皆さんにお見せしようとしています。オリンピックを開催する2016年までには、都心の樹木を今の倍にできると具体的な計算をしております。

こうした都市環境再生プランに関しては、東京都策定の「十年後の東京計画」の中にも謳っていることです。これはオリンピックに関係なく、将来、東京都がやっていかなければならない問題として取り組んでいる内容ですが、東京にオリンピックを呼べたら、これがさらにいい方向に進んでいくのではないかと思います。人を育て、緑を守り、都市を躍動させる。これこそが、未来の東京が目指しているものです。

09年10月2日開催地決定 ライバルは“東京”

――私たちメディアも、一般の方々に東京オリンピックのコンセプトを紹介することで「結ぶ」という立場にあります。そして、招致活動を紹介していくことで、一般の方は「これからどのように準備が進んでいくのか？」という興味に移っていくと思います。2016年まであと7年。実現に向けて、具体的にはどのように進んでいくのでしょうか？

河野　他の都市はわかりませんが、少なくとも東京に関しては、かなりの準備が出来ていると思います。たとえば、競技会場は34を予定していますが、そのうちの23は既存の施設があるわけです。バリアフリーにするために改修をしたりしますが、新しく建てるのは11施設しかないんですね。なおかつ、そのうちの5つは恒久的な施設で、あと6つは仮設になります。仮設に関しては工期が短い。したがって、施設の建設に関しては、立候補4都市の中ではいちばん時間がかからずに完成する自信があります。

それから、地下鉄をはじめとした交通網の利便性はすでにありますし、ホテルも十分だし、医療組織もある。必要な施設や設備がすぐに準備できるのです。

――競技施設以外にも、各国のチームや選手がキャンプをする場所も十分ですか？

河野　北京大会の際に日本で行われた事前キャンプ地は32ヶ所。相当な数の地域が各国チームのキャンプを受け入れてくれました。日本にはすでにそれだけの数の地域にキャンプを受け入れてくれる環境が整っています。

話は少し外れますが、オリンピックは選手のものでもあるけれども、大会に関わるたくさんの人のものでもあるし、世界中の人々のものでもある。試合と試合の間に選手以外の人は何をするかといったら、日本を知ること。東京からは新幹線があるので、日帰りで京都などの観光地に行ったりすることも可能です。各地のキャンプ地からも観光できる環境や交通が整っています。

――東京オリンピックのメインスタジアム（10万人収容）は新しく建設される予定ですが、そのスタジアムを2018、2022年のサッカーのワールドカップ招致にも役立てると聞いていますが。

河野　これまで、東京は首都でありながら国立競技場（5万人収容）以外に、大きな大会を開ける競技場がなかったのはさみしいものでし

た。FIFA クラブカップでも、02年のFIFAワールドカップも、東京では決勝をやっていない。新スタジアムを建設することで、これを機会に東京がスポーツ都市として次のステップに行けるのではないかと考えています。

オリンピックに向けては、羽田空港が国際空港化されることが発表されていることもあり、その羽田空港から15分のところにオリンピックスタジアムが建設されるわけです。空港から15分の立地にある国際的スタジアムは他の国にはないもの。スタジアムはオリンピックだけで使用するものではないですから、国際スポーツ大会でも、オペラでも、エキシビションでも使用できます。国際的な集まりは、空港から近いところで行われるほうがいいですよね。

――これだけ完璧なプランを立てると、財政的には苦しくなりませんか？

河野　東京でオリンピックを開催するにあたり、もうひとつ説明しなければならないのが、運営経費に税金は使わないこと。大会運営費にあたる3100億円はテレビ放映権料、チケット販売などの収入でまかなわれますし、競技会場に予定している土地のすべては東京都、もしくは公共が持っている土地なので、新たにどこかを買収する必要はありません。これは財政面で大きなメリットです。選手村も使用したあとは、一般住宅として改修して売り出される予定です。

オリンピックが終わったら、東京都民、もしくは日本の暮らしが確実に前進する計画になっています。特に、経済不況の中で活気づいていくことは間違いないでしょう。

――壮大なテーマになるのですが、オリンピックを東京で開催することによって、今後の日本にどのような影響をもたらすと思いますか？

河野　日本にもたらす影響は計り知れないですね。まず言えることは、今年の10月に開催地が東京に決まると、これから7年間は東京が世界の主役になります。色々な国と人、色々なメディアから注目されるでしょう。お気づきだと思いますが、最近では中国の報道は減っていて、ロンドンの報道量が増えています。ということは、オリンピックは莫大な報道量があって、注目を集めるということです。

今、政府観光局が「ビジット・ジャパン・キャンペーン」（※3）を行っていますが、オリンピックが決まれば観光客は当然増える。7年間それが続くので、チャンスとして利用しない手はありません。人も必要になる。新たな職も必要になる。経済も回転するでしょう。

それだけではなく、我々は招致活動においてもレガシーを残せないかということで動いています。たとえば教育の問題やオリンピック競技の問題ですとか、そういう面でも動き出しています。そうなると、招致活動に関わって動いている人が活気づいて変わってきます。招致に成功することで、大会前、大会中、大会後と色々な局面が活性化されて変化することで、日本にもたらす影響は計り知れないと言えるでしょう。

また、オリンピックの招致活動をすることによって、スポーツとは国が真正面から捉えるものだという認識が高まってくるのではないでしょうか。なおかつ、今は「スポーツ振興基本法」といった法律を作ろうとしていますから、法律が形として残る。政党に関係なく、スポーツ自体が今後の政策課題にならないといけないと思うのです。スポーツの価値というものを国として認知し、意識をする。スポーツに対し、具体的な策を国として興す非常にいいチャンスだと思います。

――色々な影響がある中で、子どもたちに対する影響が一番大きいと思いますが、どのようにお考えでしょうか。

河野　子どもに対する影響は大きいでしょうね。子どもたちは我々の残したレガシーを未来へと受け継いでくれます。また、オリンピックを通して、スポーツに憧れや夢を抱いてくれれば言うことないですね。

――最後に、10月の開催地決定に向けての手応えをお聞かせください。

河野　勝算はあります。どこの都市もいい点、悪い点がありますが、東京の場合は「安心・安全・信頼」の面で高く評価されていますし、今の経済的な状況下では東京の特徴が有効なポイントとなると思っています。したがって厳しい戦いであることに変わりはないですが、勝算は十分にありますし、いい方向に風が吹いているんじゃないかと思います。ただ、言い方は悪いですが、選挙ですから評価が高いからといって安心しているわけにはいきません。しかしながら、今のところでは、条件面を含めて、東京の計画は素晴らしいものだと自負しています。

――最大のライバルはどこの都市だとお考えですか？

河野　ライバルは東京ではないでしょうか（笑）。やっぱり、自分たちがしっかりと自分たちのやることをやっていかないと、足元をすくわれるということだと思います。そのためにはやっぱり敵を知る、つまり、己を知らないといけません。まさに、自分たちのことを見つめながら、招致活動をすることが重要だと思います。

【※1】立候補ファイル
2006年6月に立候補都市に選定されたことを受けて作成された、より詳細な大会開催計画案。IOCから示される「立候補都市マニュアル」に従って作成・提出した回答書の形になっている。

【※2】海の森プロジェクト
2016年東京オリンピックのシンボルプロジェクトであり、「10年後の東京」の「風の道・緑の回廊」づくりの一環にあたるもの。「海の森」の発案・推進役は、石原東京都知事と建築家安藤忠雄氏。東京港埋立地の中央防波堤の内側埋立地に「海の森公園」をつくり、ゴミと残土の島を、森に生まれ変わらせ、都心に向かう風の道をつくるという計画。

【※3】ビジット・ジャパン・キャンペーン
2010年に訪日外国人旅行者数を1,000万人とする目標に向け、日本の観光魅力を海外に発信するとともに、日本への魅力的な旅行商品の造成等を行うキャンペーン。

2016年東京オリンピック・パラリンピックが目指すもの

東京オリンピック・パラリンピック招致委員会　http://www.tokyo2016.or.jp/

■ 緑のオリンピック……美しい水と緑を守り、取り戻す。環境都市の"都心"で開催され、半径8km圏内で開催される世界最小のコンパクト・オリンピック。

■ "人間"のオリンピック……人間の素晴らしさと多様な可能性に出会う、本来のオリンピックの再生。人を育て、人が育てる「参加型」のオリンピック。1964年大会からの50年レガシー、2016年から50年の合計100年、世代を超えてスポーツへの熱い思いが続く。

■ 地球を結ぶオリンピック……国や民族を超えて世界をつなぐ「地球回廊」としてオリンピックをデザイン。躍動する都市、東京を通じて地球が見える。

TOKYO 2016 MAP

東京オリンピック・パラリンピック競技会場計画

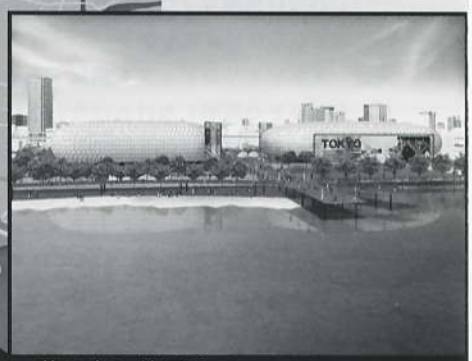
2009年3月現在

1964年東京五輪時に建設された
「国立代々木競技場」。
ハンドボール、ウィルチェアーラグビー会場

東京の中心部丸の内に位置する
「東京国際フォーラム」。
ウエイトリフティング会場

結びクラスター

ヘリテッジゾーン（1964 年東京オリンピックの遺産）と東京ベイゾーン（未来の都市環境モデル）が交わるのが「結びクラスター」。オリンピックスタジアムはこの結びクラスターに建設され、東京湾をステージに見立てている。（結びクラスターはP25 写真参照）



夢の島に位置する
「東京辰巳国際水泳場」。
水泳、シンクロナイズドスイミング会場

埋立地に囲まれた**「海の森水上競技場」**。
ボート、カヌー会場

OV 選手村　MMH 主要メディアホテル　IBC/MPC 国際放送センター　メインプレスセンター　YC ユースキャンプ

オリンピック

結びクラスター
① 陸上競技／サッカー
② レスリング
③ フェンシング／テコンドー
④ テニス
⑤ トライアスロン／水泳（マラソン10km）
⑥ ビーチバレーボール

代々木クラスター
⑦ バレーボール
⑧ ハンドボール
⑨ 卓球
⑩ サッカー

バレス・クラスター
⑪ 柔道
⑫ 自転車競技（ロード・レース）
⑬ ウエイトリフティング

夢の島クラスター
⑭ 水泳（競泳／飛込／水球／シンクロナイズドスイミング）、近代五種（水泳）
⑮ 馬術（馬場馬術、障害馬術）
⑯ アーチェリー
⑰ バドミントン、近代五種（フェンシング）
⑱ バスケットボール
⑲ 体操（体操／新体操／トランポリン）

海の森クラスター
⑳ 馬術（クロスカントリー）
㉑ ボート／カヌー（フラットウォーター）
㉒ 自転車競技（マウンテンバイク / BMX）

その他の競技場
㉓ ボクシング
㉔ カヌー（スラローム）
㉕ セーリング
㉖ 自転車競技（トラック・レース）
㉗ ホッケー
㉘ 近代五種（馬術、ランニング、射撃）
㉙ 射撃
㉚～㉞ サッカー（予選会場）

パラリンピック

結びクラスター
① 陸上競技
② パワーリフティング
③ ボッチャ / 車いすフェンシング
④ 車いすテニス
⑤ 自転車競技（ロード・レース）

代々木クラスター
⑦ シッティングバレーボール
⑧ ウィルチェアーラグビー
⑨ 卓球

バレス・クラスター
⑪ 柔道

夢の島クラスター
⑭ 水泳
⑮ 馬術
⑯ アーチェリー
⑰ 車椅子バスケットボール
⑱ 車椅子バスケットボール（決勝）
⑲ ゴールボール

海の森クラスター
㉑ ボート

その他の競技場
㉕ セーリング
㉖ 自転車競技（トラック・レース）
㉗ 視覚障害者５人制サッカー
脳性麻痺者７人制サッカー
㉙ 射撃

夏季オリンピックの歴史 1896－2012

©TAKAO FUJITA

©YOSHIO KATO

左／幻想的だった2004年アテネ大会の開会式
右／アテネの街の中心にある世界遺産・パルテノン神殿

2000年シドニー大会、女子マラソンで
金メダルを獲得した高橋尚子
©HITOSHI MOCHIZUKI

【1896】
第1回 アテネ大会(ギリシア)1896年4月6日～15日
8競技43種目・欧米先進国の14ヶ国から男子のみ280人参加

【1900】
第2回 パリ大会(フランス)1900年5月20日～10月28日
16競技60種目・19ヶ国から1066人参加(うち女子12人)

【1904】
第3回 セントルイス大会(アメリカ)1904年7月1日～11月23日
16競技87種目・13ヶ国から681人参加

【1908】
第4回 ロンドン大会(イギリス)1908年4月27日～10月31日
23競技110種目・22の国と地域から1999人参加

【1912】
第5回 ストックホルム大会(スウェーデン)
1912年5月5日～7月22日
15競技108種目・28の国と地域から2490人参加。日本が五輪に初参加

【1916】
第6回 ベルリン大会(ドイツ) ※第一次世界大戦のため中止

【1920】
第7回 アントワープ大会(ベルギー)1920年4月20日～9月12日
23競技161種目・29ヶ国から2,668人参加

【1924】
第8回 パリ大会(フランス)1924年5月5日～7月27日
19競技140種目・44ヶ国から3070人参加

【1928】
第9回 アムステルダム大会(オランダ)1928年5月17日～8月12日
16競技119種目・46ヶ国から2694人参加

【1932】
第10回 ロサンゼルス大会(アメリカ)1932年7月30日～8月14日
16競技128種目・37ヶ国1328人参加

【1936】
第11回 ベルリン大会(ドイツ)1936年8月1日～16日
21競技148種目・49ヶ国3956人参加

【1940】
第12回 東京大会(日本)→ヘルシンキ(フィンランド)
※東京で開催予定だったが、日中戦争の影響で開催を返上し、
ヘルシンキに変更。しかし、ソ連のフィンランド侵攻のため、開催中止

【1944】
第13回 ロンドン大会(イギリス)
※第二次世界大戦のため、開催中止

【1948】
第14回 ロンドン大会(イギリス)1948年7月29日～8月14日
19競技151種目・59の国と地域から4064人参加

【1952】
第15回 ヘルシンキ大会(フィンランド)1952年7月19日～8月3日
18競技149種目・69の国と地域から5429人参加

【1956】
第16回 メルボルン大会(オーストラリア)
1956年11月22日～12月8日
17競技145種目・67の国と地域・3178人参加
※馬術のみ6月10日～17日にストックホルムで開催。
1競技6種目・29の国と地域から159人参加

【1960】
第17回 ローマ大会(イタリア)1960年8月25日～9月11日
18競技150種目・83の国と地域から5315人参加

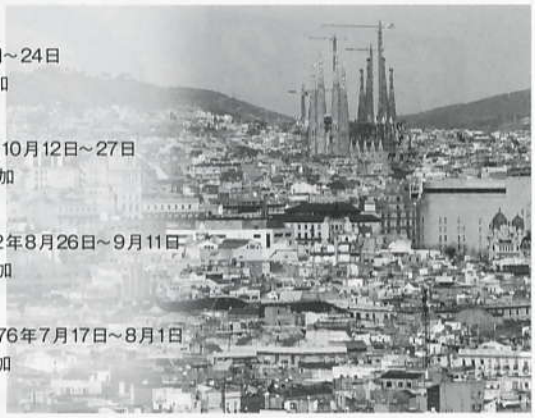
【1964】
第18回 東京大会(日本)1964年10月10日～24日
20競技163種目・93の国と地域から5152人参加

【1968】
第19回 メキシコ大会(メキシコ)1968年10月12日～27日
18競技112種目・113の国と地域から5498人参加

【1972】
第20回 ミュンヘン大会(西ドイツ)1972年8月26日～9月11日
21競技195種目・121の国と地域から7121人参加

【1976】
第21回 モントリオール大会(カナダ)1976年7月17日～8月1日
21競技198種目・92の国と地域から6043人参加

【1980】
第22回 モスクワ大会(ソビエト)1980年7月19日～8月3日
21競技203種目・80の国と地域から5283人参加(西側諸国不参加)



1992年バルセロナ大会は市内に
観光スポットが点在していた
©KIMINORI SAWADA

【1984】
第23回 ロサンゼルス大会(アメリカ)1984年7月28日～8月12日21
競技221種目・140の国と地域から6802人参加(東欧諸国16の国と地域が不参加)

【1988】
第24回 ソウル大会(韓国)1988年9月17日～10月2日
23競技237種目・159の国と地域から8473人参加

【1992】
第25回 バルセロナ大会(スペイン)1992年7月25日～8月9日
25競技257種目・169の国と地域から9368人参加

【1996】
第26回 アトランタ大会(アメリカ)1996年7月19日～8月4日
26競技271種目・197の国と地域から10,320人参加

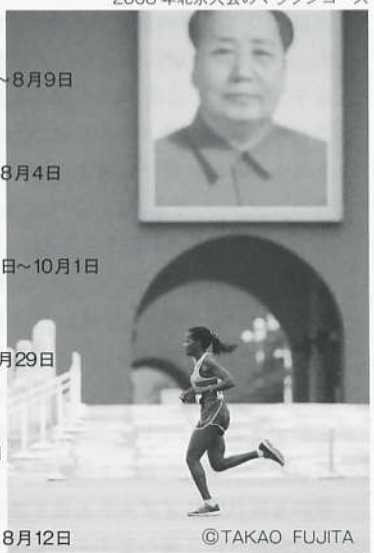
【2000】
第27回 シドニー大会(オーストラリア)2000年9月15日～10月1日
28競技300種目・199の国と地域から11,116人参加

【2004】
第28回 アテネ大会(ギリシア)2004年8月11日～8月29日
28競技301種目・201の国と地域から10,684人参加

【2008】
第29回 北京大会(中国)2008年8月8日～8月24日
28競技302種目・204の国と地域から11,193人参加

【2012】
第30回 ロンドン大会(イギリス)2012年7月27日～8月12日

北京の象徴・天安門の前を走った
2008年北京大会のマラソンコース


©TAKAO FUJITA

特集2

FLASH BACK BEIJING 2008

金9個。

文／折山淑美　Text：TOSHIMI ORIYAMA

金メダルは64年東京大会にならぶ16個。総メダル獲得数は過去最高の37個という前回のアテネ大会。その「出来すぎ」ともいえる歴史的な成果を受けての北京五輪は、誰の頭の中にも「日本、大苦戦」の文字があったはずだ。

特にアテネで8個の金メダルを量産した柔道は、07年9月の世界選手権では惨敗していた。五輪実施階級に限っていえば金メダルは女子48kg級の谷亮子の1個のみという状況。男女無差別級の金メダル獲得でお茶を濁したとはいえ、特に男子は無差別級・棟田康幸以外のメダルが、73kg級の金丸雄介の銅メダルのみと、壊滅的な状況だったのだ。

北京五輪競技開始初日、日本最悪のシナリオの幕開けと思えた。優勝は確実と思われていた谷が、準決勝で敗退して五輪3連覇の夢が途絶えたからだ。さらに、前回までは野村忠宏が3連覇していた男子60kg級では、期待の若手・平岡拓晃が2回戦敗退で敗者復活戦にも回れずにメダルさえ逃す事態になった。

大会初日に2個の金メダルで流れに乗ったアテネとは正反対のスタート。その危機を救ったのが、翌日の男子66kg級内柴正人だった。「斉藤仁ヘッドコーチから、『おまえはキャプテンだから、男子で金メダル3個を獲ればお前の仕事は完璧だ』といわれていたんです。なのに初日で平岡が負けて。『ヤバい、俺が獲らなければ数が合わなくなる』と思いましたね」

大会後、こう言って苦笑した内柴。アテネ優勝後の05年こそ、世界選手権で銀メダルは獲得したが、その後は肘の手術などもあって若手の秋本啓之にアジア大会や世界選手権の代表の座を奪われていた。相手にも研究される立場になって苦戦していた彼は、北京五輪代表にもギリギリで滑り込んでいたのだ。正直、周囲の期待度はさほど高くなかった。

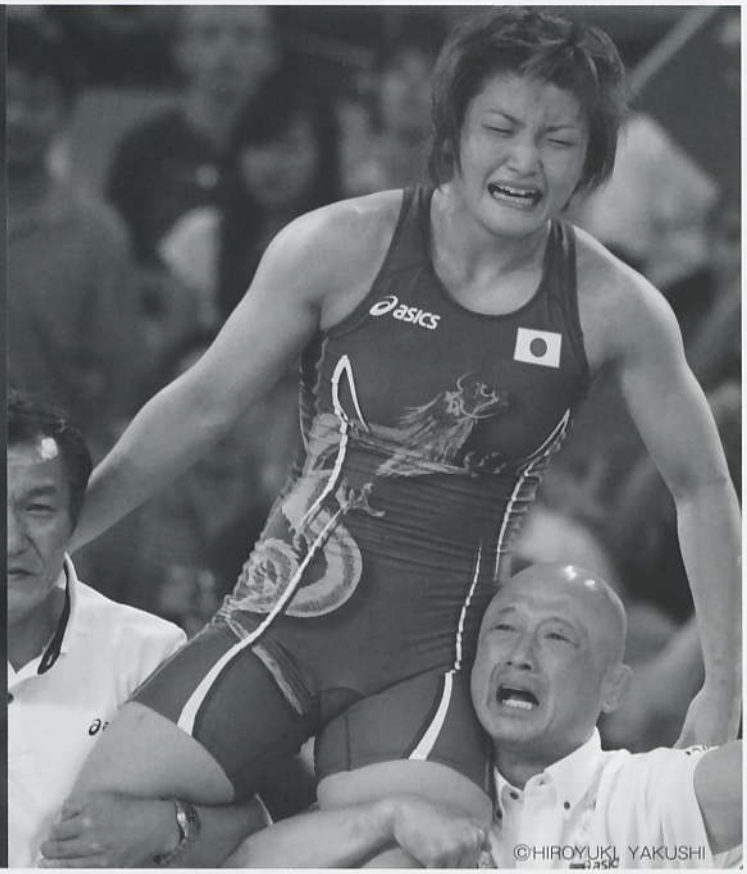
だが、終わってみれば彼は、自分の目の前にきた“運”を確実につかむ天才だった。総試合時間が10分程度と楽勝だったアテネとはまったく違う厳しい戦いながら、何とか凌ぎきって自身2個目の金メダルを手にしたのだ。

悪い流れをそこで一端断ち切った男子は、その後の4階級は鈴木桂治のまさかの敗退などで惨敗が続いたが、100kg超級で初出場の石井慧が金メダルを獲得。女子も63kg級の谷本歩実、70kg級で上野雅恵が優勝し、男女で金メダル4個と、何とか面目を保った。

さらに水泳でも、男子平泳ぎの北島康介が、危なげない泳ぎで2大会連続2冠を達成。女子レスリングでも、55kg級の吉田沙保里が圧勝し、63kg級の伊調馨が苦戦しながらも勝ち抜いて優勝するなど、期待された選手がその役割をほぼ達成して金メダル9個と面目を保った。これこそ、現在の日本の力通りの結果だといえるだろう。

● ● ● ● ●

北京の日本メダル獲得シーンの数々。その中でも北島康介の金メダル獲得は、大舞台で確実に結果を残せる彼の精神面の強さに感嘆しながらも、個人的にはホッとするような感覚の方が大きかった。



うち連覇７個が示した未来への暗示

６月末の「平泳ぎを泳げない」状態からスタートし、世界記録保持者のブレンダン・ハンセン（アメリカ）を下して２冠を獲得したアテネは感動的だった。だが北京は、かつてないほどの順調な仕上がりで臨めた大会だった。その上ライバルと目されていたハンセンは、全米予選200mで失敗して100mのみの代表と、戦わずして敗れ去っていた。

100m59秒台、200m２分08秒台を出してきた新顔の選手はいても、北京の北島の戦いはまさに自分との戦いだったと言っていいだろう。金メダルを獲得しながらも、自己ベストを出せなかったアテネ。その物足りなさを吹き払うためにも彼は、「世界記録で優勝」という高いハードルを自分に課していたのだ。それを最初の100mで実現した。北島が、世界で初めて59秒を突破する58秒91で優勝を決めた瞬間は喜ぶというより、彼に向かって「本当にごくろうさん」と言って上げたいような気持ちになっていた。

それとは違い、勝ち上がる度に信じられないような思いで興奮させてくれたのが、フェンシング男子フルーレで銀メダルを獲得した太田雄貴だった。

大会前から太田は、メダル獲得を公言していた。だがその厳しさは彼自身も分かっていて、内心では可能性があったとしても３％程度の確率だろうと思っていたという。格下と当たる１回戦はともかく、２回戦は五輪イヤーになってから急速に力を伸ばして大物食いをしていた崔秉哲（韓国）。彼に勝っても次の相手は、五輪時の世界ランキング１位で過去５戦５敗のペーター・ヨピッヒ（ドイツ）だった。崔に勝ってベスト８進出を果たすだけなら確率は５％だが、ふたりに連勝してベスト４進出となれば、確率は３％に落ちると考えていたのだ。

対崔戦、13対12とリードした展開から太田が一度はポイントを獲得して王手を掛ける14対12となりながらも、崔のビデオ判定の要求で判定が覆って13対13の同点になってしまい、さらにポイントを連取されて逆に王手を掛けられたのだ。３カ月前の高円宮杯で崔との対戦では、自信を持って突いたポイントをビデオ判定で覆され、気持ちを立て直せず敗れていた。嫌な雰囲気になった。

だが北京の太田はその時とは別人のように冷静だった。そこから２ポイントを連取して崔を返り討ち。続くヨピッヒも、彼が本調子ではないことを見抜くと、いつもはポイントを連取されていた前半を粘りきり、15対12で勝利した。

1	2	3	4

1．内柴正人／男子柔道66kg級
2．谷本歩実／女子柔道63kg級
3．吉田沙保里／女子レスリング55kg級
4．伊調　馨／女子レスリング63kg級

©HIROYUKI YAKUSHI

©MASAKAZU WATANABE

©TAKAO FUJITA

FLASH BACK BEIJING 2008

1. 北島康介／男子平泳ぎ100m
2. 女子ソフトボールチーム
3. 太田雄貴
／男子フェンシング・フルーレ

大舞台での準決勝進出。そこからが太田の太田らしさを見せつける場面だった。4人残って3人がメダルを獲れるとなれば、メダル獲得の確率は75%になる。「3%だったのが一気に75%になったから、もうメダルは獲った気になっていました」という彼は、準決勝でもアテネ五輪銀メダリストのサルバトーレ・サンツォ（イタリア）を15対14で破って銀メダル以上を確定したのだ。

その中でもすごかったのは、13対14と王手を掛けられてからの戦いだった。14点目はサンツォの「手も足も出ない」というほどの完璧な突きで取られた。だがそこから相手が勝負を急ぎ出したのを感じ取り、ジックリ待つ戦法にして逆転した。その3試合でスタミナを使い切っていた太田は、決勝ではベンジャミン・クライブリンク（ドイツ）に完敗したが、その銀メダルは、日本スポーツ界に新たな1ページを記すものだった。

フェンシングと同じように、陸上男子4×100mリレーの銅メダル獲得は、日本にとっては歴史的な快挙だった。長年、短距離部長としてもかかわってきた高野進陸連強化委員長は「個々の走力の和で見れば、3番以内というのは極めて難しいと思う。だから日本は常に4－5番に位置していて、相手のミスを待つ戦いしかなかった」と言う。

そんな千載一遇のチャンスが北京で巡って来た。日本が出た予選第1組では、アメリカやナイジェリアなど4チームがバトンをつなげずにゴールできず。第2組ではイギリスが失格し、日本は3番目のタイムで決勝進出ということになったのだ。

チームの大黒柱の朝原宣治は「メダルに挑戦してやろうというのではなく、順当にいけばメダルだという状況だったから、予選が終わってからの丸一日はすごいプレッシャーで。それまでリレーは楽しい種目だったけど、初めて怖さを感じて辛かった」とこぼす。

メダルを懸けた決勝。高く評価したいのは1走の塚原直貴と2走・末續慎吾の走りだった。世界新記録で優勝したジャマイカは、3走のウサイン・ボルトと4走のアサファ・パウエルは別格としても、1走と2走も9秒台の記録を持つ選手。太股の付け根に不安を抱えていた塚原と、200mで絶不調の走りをした末續が、そのジャマイカとほぼ並んでバトンを渡したのがメダル獲得の大きな要因になった。最後のビッグゲームとなる朝原にメダルをプレゼントしたいという、みんなの思いが実った、まるでドラマのような結末だった。

● ● ● ● ●

他にも、長年立ちはだかってきたアメリカの壁をやっと撃破したソフトボールの金メダル獲得も感動的だった。だがそれらの競技は、その結末にたどり着くために挑み続けてきた道のりがあったことを忘れてはならないだろう。ソフトボールでは上野由岐子の3連投あってこそだが、これまで押さえ込まれていたアメリカのエース、キャサリン・オスターマンから得点を奪えたのも、選手たちが彼女の攻略への執念を持ち続けていたからだ。

またフェンシングも、3種目あるうちのフルーレに絞り込み、アテネ五輪以前の海外遠征費個人負担という状況を変える取り組みから始まっている。さらには6000万円を超える寄付金を、すべてフルーレの全日本チームのみにつぎ込み、JISS（国立スポーツ科学センター）を拠点にした500日合宿実施という英断を下したからこそ獲得できたメダルだ。太田は「女子の菅原さんが7位にはなっていたけど、僕や千田がベスト16で敗退していたら、選手は『ご苦労さん』と労われても、関係者は責任問題を追求されていたと思う」と話していた。彼がベスト16の対崔戦の勝利直後に、マスクを投げ捨ててまで喜びを爆発させたのも、最悪でもアテネ以上のベスト8進出は果たさなければいけないという、大きなプレッシャーとも戦っていたからだ。

さらに陸上の4×100mリレーに至っては、「リレーで男子短距離を強化しよう」と始めた、88年ソウル五輪からの強化の積み重ねの結果だ。世界に出て、世界を知り、日本人が自分の体で表現できるものを研究し、作り上げてきたからこそ、20年目にして手にすることができたメダルだ。レース後高平慎二は、「今までやってきた短距離選手だったり、今までやってきた陸上選手の集大成というか。ウイニングランの時にスタンドで為末さんが泣いているのを見て、本当に僕らだけがやっている競技じゃないな、と感じました」と言った。そして末續も「日本人が競技を始めましたというところから、いろんな工夫をして、科学的なところを突き詰めてもまだ敵わないところはあるんで…。『嬉しかった』というコメントだけで終わるものじゃないですよ」と言った。それが歴史を背負って走った彼らの、正直な気持ちだ。

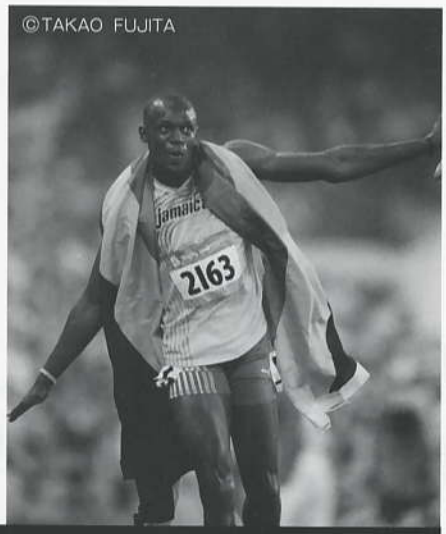
● ● ● ● ●

五輪が終わる度、メディアで話題になるのはメダリストの報奨金だ。確かにそれは、彼らの努力に報いる物であり、彼らのモチベーションにもなるものだ。だがそんな一時金より必要なのは、そこへ向けてどれだけの資金をかけ、どれだけの努力や工夫を積み重ねてきたかということだろう。身体能力だけを比べれば欧米人には劣っている日本人が、世界と戦うためには時間と想像力と、それを推進させる資金が必要だ。しっかりと将来を見据えた、長期的な取り組みが結果を出してくれるということを、北京五輪で選手自身が教えてくれた。

ただ、金メダルに限れば、大会前の目標をほぼクリアする9個を獲得できた日本だが、内容を見ればそのうちの7個が連覇だった。新たな金メダリストの柔道100kg超級の石井慧は総合格闘技に移り、ソフトボールは次のロンドン大会では実施されない。

その意味でも北京五輪はこれまでの集大成の大会であり、日本スポーツ界はまた新たな一歩を踏み出さなければいけない時を迎えたといっていい。昨年完成したナショナルトレーニングセンターやＪＩＳＳをどう活用して長期的なプランを推進させていくのか。日本スポーツ界の底力が本当に問われるのはこれからだ。

4．ウサイン・ボルト（ジャマイカ）
5．男子陸上4×100mリレーチーム



©MASAKAZU WATANABE

FLASH BACK BEIJING 2008

最強を

©JUN TSUKIDA

©HITOSHI MOCHIZUKI

©MASAKAZU WATANABE

下した“伝説”の金

文／小野哲史　Text：TETSUSHI ONO

あれから半年が経つというのに、目を閉じれば、あの日の光景が鮮やかに蘇ってくる。山田恵里が右中間へ放ったホームラン、決勝トーナメント3試合のマウンドをたった一人で守り抜いた上野由岐子の力投、そして豊台ソフトボール場に流れた君が代…。おそらくこの先何年、何十年と時が流れても、あの夏の記憶が消え去ることはないだろう。

2008年8月21日、中国・北京――。斎藤春香監督率いる日本代表は、決勝で王者アメリカを打ち破り、悲願の金メダルを獲得した。

ソフトボールがオリンピックの正式種目となった1996年のアトランタ大会以後、シドニーで銀メダル、アテネで銅メダルを獲得した日本は、北京でも有力なメダル候補だった。しかし、「金メダル候補」となると、話は変わってくる。アトランタから3連覇、世界選手権でも1986年から6連覇。圧倒的な強さを誇るアメリカの優位は、揺らぎそうになかった。斎藤監督は大会前、「今まで成し得なかった金メダル獲得という目標に向かって頑張ってきた。チーム一丸で金メダルを獲りたい」と語っていたが、その可能性はかなり低いように思えた。

ソフトボール競技が開幕してから北京入りした私は、予選リーグでの日本の戦いぶりをほとんど知らない。出発前は準備に追われ、現地に入ってからも他の競技を観て回っていたからだ。14日のオランダ戦だけは、ＪＯＣジャパンハウスでテレビ観戦したが、結果的に最下位に終わることになるオランダとの一戦で、日本の実力を推し量ることは難しかった。むしろ衝撃を受けたのは、15日のアメリカ戦である。０－７、５回コールド負け。インターネットで試合結果を知ったとき、金メダルがはるか彼方に遠のいてしまったような気がした。

ただ、決勝トーナメントに入り、決勝進出をかけて戦った20日のアメリカ戦をスタンドで観ていると、想像していたほど日米間に差がないという思いもあった。予選リーグで温存した上野が先発を務めたことで、アメリカがまったく歯の立たない相手ではない印象を受けたのだ。いや、理由は上野だけではない。延長9回に主砲ブストスにスリーランを浴びて敗れはしたが、他の選手たちも今大会チーム防御率0点のアメリカから1点をもぎ取った。日本チームは前回の対戦より確実に強くなっていた。

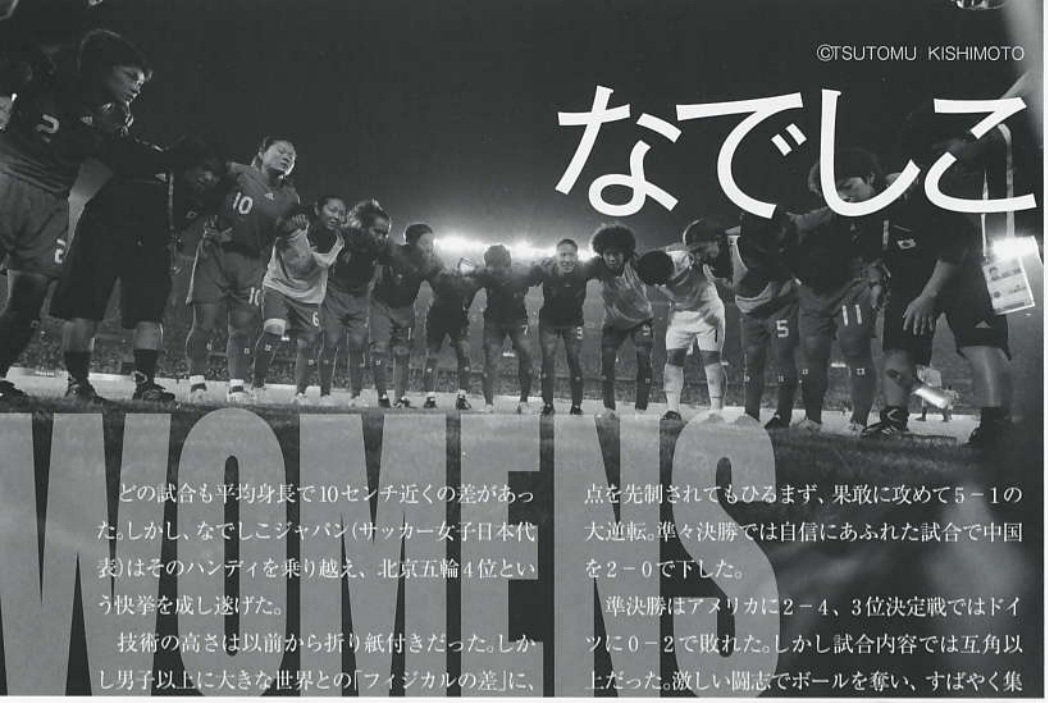
それから5時間後に行われたオーストラリア戦。勝てば、アメリカとの優勝決定戦へ進み、負ければ、銅メダルである。逆転に次ぐ逆転の文字通り「死闘」が演じられたこの試合、先発の上野は延長に入ってから右手中指を負傷し、そのことをチームメイトに黙っていたという。

「なるべくみんなにわからないように投げようと。キャッチャーや野手を不安にさせたくなかった」。上野がそう話しているのを、大会後のドキュメント番組で見たが、実はチームメイトはエースの異変に気づいていたらしい。野手や控え選手の間で「上野のために」という気持ちが自然発生的に芽生えていた。1塁側スタンドにいる私に、そんなことが起きていたなど知る由もなかったが、チームに一体感が生まれていたのは伝わってきた。アテネで2戦2敗だったオーストラリアに対し、12回裏に西山麗のサヨナラヒットで雪辱を果たすと、日本は今大会三度目となるアメリカへの挑戦権を手にした。

翌21日、私は事前に入手していた卓球の観戦チケットが無駄になるのを承知で、豊台ソフトボール場に向かった。どうしても日本の最後の戦いを目に焼きつけたかった。そして試合は期待以上のものだった。パワーを前面に押し出してくるアメリカを、チーム一丸となった日本が気迫で上回る。ダメ押し点を生んだ藤本索子の倒れ込みながらのバッティングや、廣瀬芽のダイビングキャッチは、まさに「執念」と言っていいプレーだった。

最後の打者を打ち取り、マウンド付近に上野を中心とした歓喜の輪ができたとき、胸の奥底から熱いものがこみ上げてきた。その一方で、ソフトボールの除外がすでに決定している4年後のオリンピックを思うと、一抹の寂しさも感じずにはいられなかった。感動的な表彰式の後、記念撮影をする日本、アメリカ、オーストラリアの選手たちの前に、ボールを並べて作った「2016」の文字があった。誰もが2016年大会での、ソフトボールの正式種目復帰を望んでいるのだ。

日本代表が作った“伝説”は、掛け値なしに素晴らしい偉業である。しかし、今後、そうした伝説が生まれる可能性さえないというのは、スポーツを愛する者にとってあまりに寂しい。この魅力あふれるソフトボールで、次世代の選手たちがオリンピックという最高の舞台でプレーする。そんな日が再び来ることを願ってやまない。



©TSUTOMU KISHIMOTO

なでしこ大躍進

文／大住良之　Text：YOSHIYUKI OSUMI

どの試合も平均身長で10センチ近くの差があった。しかし、なでしこジャパン（サッカー女子日本代表）はそのハンディを乗り越え、北京五輪4位という快挙を成し遂げた。

技術の高さは以前から折り紙付きだった。しかし男子以上に大きな世界との「フィジカルの差」に、なでしこは苦しめられてきた。04年秋に就任した大橋浩司監督は、大きな選手に負けない当たりとヘディングなど基礎的な能力を徹底的に鍛えた。そして08年はじめに引き継いだ佐々木則夫監督が伸び盛りの若手を注入、北京で戦えるチームをつくった。

1分け1敗、勝つしかない状況で迎えた1次リーグ第3戦の相手は優勝候補の一角ノルウェー。1点を先制されてもひるまず、果敢に攻めて5－1の大逆転。準々決勝では自信にあふれた試合で中国を2－0で下した。

準決勝はアメリカに2－4、3位決定戦ではドイツに0－2で敗れた。しかし試合内容では互角以上だった。激しい闘志でボールを奪い、すばやく集団でパスをつなぎ、そして果敢に相手ゴールに迫った。何よりも、1－4と差を広げられた準決勝のロスタイムに執拗なプレーからFW荒川恵理子が返した1点は、「最後の最後まであきらめない」という「なでしこ魂」を如実に表す得点だった。

10センチの身長差を急に縮めることはできない。しかし戦う姿勢さえあれば、持ち前の技術で世界に十分対抗できることを、なでしこは北京の舞台で証明した。事実、なでしこの戦いでコンプレックスを払拭した次世代の選手たちは、11月のU－17女子ワールドカップ（ニュージーランド）、12月のU－20女子ワールドカップ（チリ）で世界を驚かせる活躍を見せ、上位進出を果たした。U－17のFW岩淵真名は大会MVPに選出された。

この大会を最後に、DF池田浩美、MF加藤輿恵という、長い間なでしこジャパンを支えてきた選手たちが代表を退くことになった。なでしこジャパンは世代交代を迫られることになる。しかし北京で活躍したMF宮間あや、FW大野忍、FW永里優季、MF阪口夢穂など、「次代」を担う選手たちが次々と出てきている。そしてその背後には、U－20やU－17の選手たちが出番を待ち構えている。

北京五輪の「4位」は一過性のトピックではない。「恒常的に世界の五指に入る」という「なでしこビジョン」実現に向けての歴史的な第1歩であり、日本の女子サッカーから世界に向けての力強い宣戦布告でもある。

マイペースでつかんだ快挙

文／田中夕子　Text：YUKO TANAKA

太田雄貴が成し遂げた偉業は、まさに歴史的快挙と呼ぶにふさわしいものだった。

日本フェンシング界にとって悲願であるオリンピックでのメダル獲得に向け、日本協会はウクライナからプロコーチのオレグ・マチェイチュクコーチを招聘し、国立スポーツ科学センター（JISS）を拠点に500日にも及ぶ強化合宿を敢行。スポンサー探しに奔走し、集めた資金の大半が、最もメダル獲得が高いと見込まれた男女フルーレの強化費に当てられた。

その中心にいたのが太田だった。17歳、史上最年少で日本選手権を制し、アテネ・オリンピックでもやはり日本フェンシング界にとって「史上最高」の9位。「史上最高の逸材」に寄せられる期待は大きく、同時に、プレッシャーも日ごとに増していった。

「もともとテンションが上がりすぎてしまうので、北京には自然体で臨みたかった」

不安と重圧に打ち勝つため、太田が選んだのは「マイペース」を貫くこと。開会式にも出ず、中国に入国したのは試合直前になってから。自身も認める「出たがり屋」なのだが、開幕1カ月前から一切の取材を控えた。フェンシングを何とかメジャーにしたい。その一心で、心技体を最大限に高めることに努めた。

初戦から、太田の代名詞でもあるスピードと思い切りのいいアタックが冴え渡る。2回戦で、5月に東京で開催された「高円宮杯フェンシングワールドカップ」で惨敗を喫した崔秉哲を14－14からの1本勝負で下すと、喜びを全身で表すかのごとく、場内に響き渡るほどの雄たけびを上げた。

準々決勝で世界ランキング1位のヨピッヒ、準決勝で同7位のサンツォとこれまで対戦成績では圧倒的に劣っていた上位ランクの選手を次々打破し、遂に決勝進出。この時点でメダル獲得を確定させた。

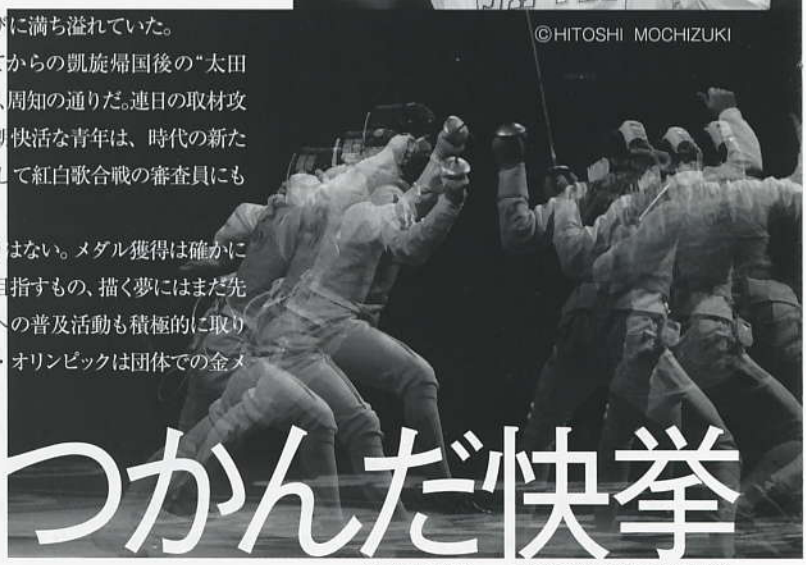
迎えた決勝戦、太田はスタンドで陣取る仲間たちに向け、右手で小さく、二度、Vサインをして見せた。口元に笑みを浮かべ、スポットライトに照らされたピストに上がる。もはやプレッシャーなどない。この場で戦える、そして多くの人にフェンシングを知らしめることのできる喜びに満ち溢れていた。

銀メダルを手にしてからの凱旋帰国後の"太田フィーバー"については、周知の通りだ。連日の取材攻勢、イベント出演。明朗快活な青年は、時代の新たなスポーツヒーローとして紅白歌合戦の審査員にも選出された。

だが、太田自身に驕りはない。メダル獲得は確かに悲願であったが、彼の目指すもの、描く夢にはまだ先がある。「子どもたちへの普及活動も積極的に取り組みながら、ロンドン・オリンピックは団体での金メダルを狙います」

ジュニア、カデットなど若い世代も国際大会で優勝を遂げるなど成長は著しい。太田が築いた"世界照準"に追いつき、追い越し、さらに高い頂を目指していく。

©JUN TSUKIDA



©HITOSHI MOCHIZUKI

攻め続けた末の結果

文／山崎浩子　Text：HIROKO YAMASAKI

どこまで攻めるか、どこで守るか…。勝負どころというものはいつでも難しい。

北京オリンピックに向けて男子体操競技の面々はAスコアのレベルアップにやっきになっていた。2006年からのルール変更により、10点満点が廃止。いくら美しい体操をしても、技の難易度を示すAスコアが低ければ勝負にはならない。体を鍛え直し、構成を工夫し、難易度の高い技に挑戦し続けてきたのである。

そして迎えた北京オリンピック。連覇を狙った日本は地元中国には及ばなかったが、2位で二大会連続のメダルを獲得し、個人総合でも19歳の内村航平が、実に24年ぶりとなる銀メダルを手にした。あん馬で二度落下し、22位まで後退しながらも、攻め続けた結果だった。

シドニー・オリンピックから三大会続けて日本男子体操チームのコーチとしてチームを率いてきた森泉貴博氏は語る。「どの国もどの選手も、これまでにないぐらい、ひどい出来でした。Aスコアを上げるために、自分の能力を超える演技構成をしてきたのがその原因だと思います。失敗が出る可能性は予測できたので、我慢の試合だと思っていました。予想通り多くの選手がミスを犯す中、日本は内村を筆頭にどの選手も、ミスに落ち込むことなく最後まであきらめることはなかった。それがメダル獲得の要因です」

内村は練習がきちんとこなせていれば試合もでき、やれていなければ試合も良い結果を残せないタイプだという。裏を返せば、しっかりと練習に取り組み、攻め続けてきたからこそ、最高の舞台で最高のパフォーマンスができたと言えるだろう。

一方、金メダルの中国は、「オリンピック直前の全国中国大会（最終選考会）ではめいっぱいに技を上げ、北京本番では少し技のレベルを落としていた。堅実にまとめてきたという印象でした」（森泉氏）

攻めるだけ攻めて、そこから一段レベルを落として余裕を持たせるという手段で金メダルをもぎとったのであるが、底力があるからこそやれた戦略である。

オリンピック後、冨田洋之、鹿島丈博のベテラン二人が引退した。冨田のつり輪、鹿島のあん馬は世界に誇れるものであり、その穴を誰がどれだけカバーできるのか、課題は多い。

しかし、内村ほか、中瀬卓也、沖口誠、坂本功貴、星陽輔ら若手選手の成長も著しい。攻めなければ勝てない。だが攻めるべき力がなければ攻めることさえできない。どこまで攻めるか、どこでまとめるか…。頭を悩ませながら、金メダル奪還をめざしての歩みが始まった。

FLASH BACK BEIJING 2008

バトンへのこだわり

文／杉山茂樹　Text：SHIGEKI SUGIYAMA

五輪報道の中心は、メダルを懸けた戦いだ。3着と4着では月とすっぽん。僅差でもメダルを逃せば、人々の記憶から消えていきやすい宿命がある。五輪通を気取るなら、4着を忘れるワケにはいかないが、逆に言えば、まさかの3着、まさかの銅メダルには、五輪通ではない一般人にも、強烈な印象を与える力がある。

個人的には「ニッポン！」と叫べるものが、選手の個人名を叫ぶものより好きだ。五輪を国別対抗戦と捉えれば「ニッポン！」は、個人名より遥かに明快な声になる。つまり、バレーボール、サッカー、野球などのいわゆる球技モノが強いと、五輪観戦はより楽しくなると勝手に思っているが、北京で金メダルを獲得したソフトボールは、他の球技モノが振るわなかったこともあり、ひときわ燦然と輝いて見えた。

チームスポーツの根底に流れているのは、フォアザチームのメンタリティだ。日本では特にそんな気がする。日本のサッカー界に漂う、ボールを大切に繋ごうとするパス好きの精神もそこに起因する。強引にドリブルしたり、強引にシュートを打って失敗すると、周囲からはむしろ、冷たい視線を容赦なく浴びせかけられる。

野球やソフトで言えば送りバントだ。送りバントに失敗する姿は、必要以上に情けなく見える。フォアザチームの精神から外れたプレイとして、後ろ指を指されることになる。

陸上で言えば、バトンやタスキの受け渡しだ。リレーの選手に選ばれれば、小学校の低学年でも、バトンパスの練習はみっちりさせられる。うっかり落としてしまえば、体育の先生から、雷を落されたものだ。

北京五輪の陸上男子4×100mリレーで、日本が銅メダルを獲得したことに、必然を感じるのは僕だけではないはずだ。漁夫の利。ラッキーな結果として片づけずに、日本中が感激の嵐に包まれる理由もわかる気がする。日本人がこだわっている箇所を、改めてみせられた気がした。外国人がそこにほとんど頓着ないことも、同様にはっきりした。バトンパスを次々に失敗し、消えていく姿は、日本人には理解しがたいものがある。田舎の運動会でさえ、絶対あり得ない光景だ。

そこで疑問が湧く。外国にはいったい、運動会を行う習慣があるのだろうか。少なくとも僕は、外国で見た例しがない。運動会は日本古来の伝統文化なのか。誰か教えてください。

©SHINJI AKAGI

©TSUTOMU KISHIMOTO

2年後の「北京五輪」

文／原田公樹　Text：KOKI HARADA

北京五輪から半年が過ぎた。あの地で見た懐かしい顔たちが欧州で頑張っている。

優勝したアルゼンチン五輪代表の右バックだったサバレタは、大会後に移籍したマンチェスター・シティーで主力だ。準優勝したナイジェリア五輪代表で日本からゴールを奪った巨漢FWアニチェベは、エバートンで準レギュラーを張り、3位だったブラジル五輪代表のMFアンデルソンはマンチェスター・ユナイテッドで、およそ2戦に1度は出場している。

イングランドだけではない。スペイン、イタリア、オランダなど各リーグのダイジェスト番組を見ていると、懐かしい顔によく出くわす。北京では名もない選手だったが、わずか半年で堂々たる貫禄を漂わせている。

しかしブルーをまとっていた顔は、とんと見ない。本田圭佑がオランダ2部のVVVフェンロで奮闘しているくらいである。

長友佑都、内田篤人、安田理大、香川真司、岡崎慎司らはフル代表に定着したが、欧州のクラブが興味を持った、という噂は聞かない。彼らが欧州への移籍を目指し、アクションを起こしたという話も聞かないし、そもそも欧州の各クラブの強化担当者は、彼らの名前も知らないだろう。

1得点だけしか挙げられず3連敗し、北京五輪なのに北京の地で戦うことなく帰国した日本と、メダルを提げて帰った上位3位チームとの差は、わずか半年で大きく開いてしまった。懐かしい顔の何人かとは、また来年、南アフリカで会うことになるだろう。そこでまた名を売って、欧州の強豪クラブへ買われ、そのうち何人かは欧州チャンピオンズリーグという世界最高峰の舞台でプレーすることになる。

ようやくそのころ反町ジャパンだった面々は、気づくだろう。2008年の夏に一緒に戦った連中が、2年ではるか手の届かない選手に変貌したことを…。

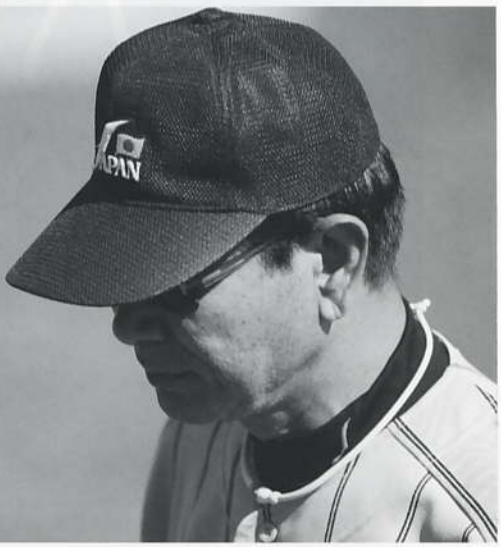
北京五輪の惨敗の原因は、日本協会の失策、指揮官の力量不足など、周辺の問題は山ほどあるが、もっとも足りなかったのは、選手たちのやる気だ。北京五輪はひとつの節目で、これをきっかけに世界へ出て、もっと有能な選手になって、さらに稼いでやろうという野心を欠いていた。

日本がワールドカップで8強、16強入りするには、主力のほとんどが欧州でプレーをしているようなチームでなければ無理だ。その2年前の五輪は、欧州へ出るための格好の見本市だったが、プロとしての生命力が弱い日本の選手たちは、この機会を逃してしまった。

日本の選手たちは、向いている方向が違う。いまこうしている間も、どんどん世界から置いていかれているのである。

不完全燃焼！北京の夏

©TAKAO FUJITA



文／人見和生
Text：KAZUO HITOMI

真夏の8月23日、北京五輪で星野ジャパンメダルなし、オールプロでも屈辱の4位。そんな結果が出た直後、投手陣の柱と期待されながら、登板3試合で0勝1敗防御率5.14と不完全燃焼だったダルビッシュ有が漏らしたコメントは、好調時の彼の速球のように、いいところを突いたものだった。

「見ている人の方が悔しかったと思います」

だからこそ、メディアもファンもその悔しさの分だけ、貧打、失策、故障などたくさんの敗因を持ち出してきた。その様は、女子ソフトボールの金メダル獲得騒ぎをその二日前に見ている目に、強烈なコントラストとして映った。

金・韓国、銀・キューバ、銅・米国。日本はその3強に1勝もできずに4位。これは、敗因が何であるにせよ、王貞治氏（当時ソフトバンク監督）が語ったように「上位3チームは、選球眼のよさなどを含め、すべてにすごかった」からと、納得するべきなのだろう。

©TAKAO FUJITA

しかしだ。時は移って秋深い11月9日。巨人・埼玉西武の日本シリーズ第7戦を観戦していて、北京五輪における星野ジャパンの屈辱を、あらためて我が脳裏に蘇らせてしまった。

それは、同点に追いついてなお2死1、2塁と西武が攻めていた8回表だった。原監督は、7回からリリーフさせた越智を、意外にもそのまま続投させた。が、この回3四死球1失点でもう限界点。結局、平尾に逆転の（決勝）中前打を、打たれるべくして打たれてしまう。8回は、先頭打者から投手交代ではなかったか。

越智の続投で蘇った悪夢が、北京でメダル確定をかけた準決勝の対韓国戦である。同点の8回裏1死1塁で打席は今大会大不振の李承燁。日本のマウンドは岩瀬だったが、今大会すでに2敗と絶不調。低迷者同士のこの対戦は、フェンスぎりぎりとはいえ、結果的には大きな2ランがライトスタンドに弾んだ。

星野監督は「あそこは岩瀬しかない。それがうちのパターン」と言い切ったが、これに素直にうなずく人間はそう多くはないはずだ。

未だに北京のあの悔しさを思い出すだけに、結果論とのそしりを受けても、敗因のひとつに監督の采配（継投）ミスを加えたい。これ以外の場面でも、何度あったか知れないのだから。

09ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）。日本のV2とともに不完全燃焼で終えた北京の夏の雪辱を果たすためでもあるこの戦いは、締め切り時点ではすでに第1ラウンドを終えているはずだ。原辰徳監督には、彼の率いる日本代表が采配ミスなどものともせず、快進撃を続けていることを祈るばかりだが、果たして……。

「JUDO」に敗れ去った「柔道」

文／藤田孝夫　Text：TAKAO FUJITA

「メダル獲得表」いつの大会からだろうか、メディアは五輪を語るとき、必ずこの表を作成するようになった。

メダル獲得表において、通常一つの金メダルは、百個の銅メダルよりも重い。しかしその国の競技力を量る時、たった一つの金メダルより、百個の銅メダルを獲った国のほうが強いはずである。ただ日本柔道は、前者の論理で成り立っている。女子52kg級弱冠19歳で銅メダリストになった中村美里は言った。

「金以外は同じです」

ここでは敢えて、後者の論理で日本柔道を考えてみたい。金メダルは男子2個、女子2個。これだけを見れば、むしろ上出来に映る。最終日に100kg超級を石井慧が金で締めくくった事もあり、日本柔道が駄目だったという印象は残らなかった。実際女子においては、7階級中6階級で入賞、5人のメダリストを生んでいる。しかし男子においては、先述の石井と66kg級の内柴正人以外は、一人のメダリストもいない。加えて言うならば、他の5階級の選手は、全て1～2回戦で敗れている。

確かに過去の国際大会でも、優勝候補といわれる日本人が早々に姿を消すことはあった。しかしそれらの多くは、奇襲（例えば日本人があまり使わない「もろ手刈り＝レスリングのタックルに似た技」など）に失するところが多かった。しかし北京五輪の畳に散った選手たちは、確かに奇襲では無く、力と技で負けていた。大本命と見られていた100kg級の鈴木桂治は、初戦モンゴル代表のツブシンバヤルの前に「もろ手刈り」で敗れる。誰もが奇襲にやられたと思った。しかし鈴木が次の敗者復活戦初戦でも敗れたのに対し、ツブシンバヤルは優勝してしまう。日本柔道界を憂う象徴的なシーンだった。

五輪の正式種目となり11度目となった北京大会。さながら日本vs中国の図式で盛り上がった女子柔道に比べ、男子柔道では実に多くの国から優勝者が生まれた。アゼルバイジャン、グルジア、モンゴル。要するに世界の「JUDO」の層が厚くなっているのだ。今までのように、韓国、フランス、ドイツ、ロシアの選手だけがライバルではない。日本柔道がこの潮流を受け止めるためには「柔道」の層を厚くする事が急務だ。例えば選考基準をもっと明確化し、選手のモチベーションを上げながら2番手、3番手を育てるのも一策だろう。北京の金4個の内、3個が連覇によるものという事実は、賞賛の陰にある問題も呈している。

確かに北京で、男子は2個の金を獲得した。しかしメダル総数も2個という数字は、五輪史上で最低となった。

FLASH BACK BEIJING 2008

そんなには強くなかった日本女子マラソン

文／石井 信　Text：MAKOTO ISHII

北京五輪の開幕を前にして野口みずき選手が、左脚大腿部裏の肉離れのため欠場を発表し、土佐礼子選手が左足外反母趾痛のために途中棄権し、中村友梨香選手は13位。女子マラソンは、予想外の結果に終わった。日本にとっては、3大会連続の金メダルを逃しただけでなく、有森裕子選手の92年バルセロナの銀、96年アトランタの銅を含めての連続メダルも、ここで途切れてしまった。

8月17日に行われたレースは、男子マラソンのようにレベルの高いものではなく、野口選手が出ていれば金メダル、あるいは痛みなく土佐選手が走っていればメダル、と思えるものだっただけに残念ではあった。

しかし、冷静に考えてみれば、むしろ、連続金、あるいは連続メダルを重ねてきたことのほうが、不思議だった。

オリンピックでの毎回のメダルという活況に惑わされがちだが、日本の女子マラソンは、以前から、そんなには強くなかった。あるいは、強い選手の層は厚くなかった。

有森裕子、高橋尚子、野口みずきという3選手が、マラソン練習に故障はつきものなのに、オリンピックでは奇跡的に、その故障を回避することに成功して臨むことができた結果の連続メダル。一人が、あるいは二人もが、故障して、なおかつメダルを望めるほどの選手層ではなかった。

現実に中村選手が代表の座を射止めた08年名古屋国際女子マラソンの優勝タイムは、悪条件のレースでもないのに2時間25分51秒。名古屋から5カ月。その選手に、メダルを取りなさいというのは、酷だろう。

北京五輪の女子マラソンで日本は惨敗した、という表現を私はあまり好きではない。オリンピックは、各国・地域オリンピック委員会（NOC）の統括のもと、国・地域を代表しなければ参加できないのだから、そう表現されるのも仕方がない。でも、マラソンは個人競技。野口選手は故障に泣き、土佐選手は痛みを乗り越えられるかと思ってスタートしたが、それができず、中村選手は力及ばず13位だった、というほうが好きだ。

土佐選手は引退だが、野口選手は現役続行。野口選手と2番手以降との力の差は、いまのところ大きいが、可能性ある選手は出てきている。選手層が厚くなるかどうかは、それらの可能性のある選手とそのコーチの個人的な努力が、スポンサーなどのサポートに支えられ、実るかどうかに、かかる。

COLUMN.1

レンズを通した北京五輪 スムーズだったセキュリティチェック

©TAKAO FUJITA

文/水谷 豊　Text : YUTAKA MIZUTANI

2008 年8月8日から 24 日まで中国の北京にて第 29 回夏季オリンピック競技大会が開催された。開幕前は大気汚染や食の安全が懸念されていたが、史上最多の 204 の国と地域から約 11,000 人のアスリートが参加して、28 競技・302 種目が行われた。日本選手では陸上・男子 4×100mリレーの銅メダル、フェンシング・太田選手の銀メダル、女子ソフトボールの金メダル、海外の選手では陸上・男子 100mのボルト選手の世界記録樹立の瞬間などが印象的であったが、残念ながら私はどの瞬間にも立ち会うことが出来なかった。

そんな今大会で私が競技以外で一番印象に残っている事は「セキュリティチェックがスムーズであった」ことだ。

オリンピックの取材は初めてであったが、アジア大会や他の総合大会と比べるとセキュリティチェックが非常にスムーズであった。何が違っていたかといえば"入る"時に行なっていたチェックを"出る"時に行なっていたのである。通常はMPC（メインプレスセンター）に入る時にチェックを受けて、各競技会場に入る時にもまたチェックを受けなければならなかった。しかし今大会ではメディアヴィレッジを出るときに一度チェックを受ければ、MPCに入る時も、MPC敷地内から出るバスで競技会場に入る時もチェックを受ける必要がなかったのである。

これには二つの要因が挙げられる。一つは各メディアヴィレッジにセキュリティを設置したことである。メディアヴィレッジは二つ、トータルで 7000 部屋。その両方のヴィレッジにセキュリティが設置されていた。それ以外の各メディアホテルにもセキュリティがあったかは不明だが、相当な数のボランティアがセキュリティチェックにあたっていた。通常オリンピックのボランティアの人数は多くても5万人。しかし今大会のボランティアは7万人余り。通常の 1.4 倍である。このボランティアの人数の多さがあったからこそできたと考えられる。

もう一つはMPCの敷地内にバス停を設置したこと。通常はMPCの外にバス停があるので、一度敷地（セキュリティ）を出てからバスに乗るため、競技会場に入る時に再度チェックを受ける必要があった。今大会では敷地内から直接バスで移動することによって各競技会場でのチェックを省略することができた。もちろん一度敷地内から出た場合は、もう一度チェックを受けなければならないが、チェックを受ける人間の絶対数が少ないのでとても早く済んだ。一日に何種目も掛け持ちで取材しなければならない者にとってはセキュリティチェックを受ける時間を短縮できたことは非常にありがたかった。今後もこのスタイルを継続してもらいたいものである。

©RIMAKO TAKEUCHI

FLASH BACK BEIJING 2008

COLUMN. 2

それぞれの思いの北京五輪

文 / 増島みどり　Text : MIDORI MASUJIMA

©TSUTOMU KISHIMOTO

北京五輪が終って数カ月が経過した頃から、大会を振り返る企画が多く寄せられる。いつもなら、メダルも、プレーも、MVPもそう悩まずに選べるはずである。ところが今回に限っては、過去取材をしてきたオリンピックと少し様子が違う。現地で取材した日本選手や、彼らが活躍したシーン、或いは試合にまつわる感動的なエピソードを真っ先に思い出すわけではないからだ。

五輪が開幕した8月8日午後、飛行機に搭乗し、ベルトもしっかり腰に巻いたというのにいっこうに出発する気配がない。乗客もイライラし始めた頃、中国語のアナウンスが入り、全員で飛行機を降り、安全検査を再度行うという。機体トラブルと言われたが、安全検査を全員がやり直し、さらに搭乗口で待つ。そのうち菓子パンや飲み物が配布される長期戦で、出発予定時刻から実に4時間が経過してようやく飛んだが、今度は降りた場所が何と天津空港。北京に向かう航空会社に、爆破予告があったことを到着して知った。天津から北京のホテルに着いたのは午前3時だった。

しかし苦労話をしたいのではない。楽しかったのだ。同じフライトには、直前にケガをしてしまった体操の米国女子チームの代表と、付き添うお母さんがいて、五輪開会式のプラチナチケットを持った中国人一家は焦っていた。スタジアム建設に携わったご主人の作品「鳥の巣」を見に行く奥さんもいれば、オグシオ、スエマエ、で大きな注目を浴びたバドミントンの後方支援部隊、家族も乗っていた。競技、選手を長く取材してきたが、あのフライトが遅れなければ、彼らと長い時間を共有し会話をしなければ、知ることのなかった五輪があったように思えるからだ。

©TSUTOMU KISHIMOTO

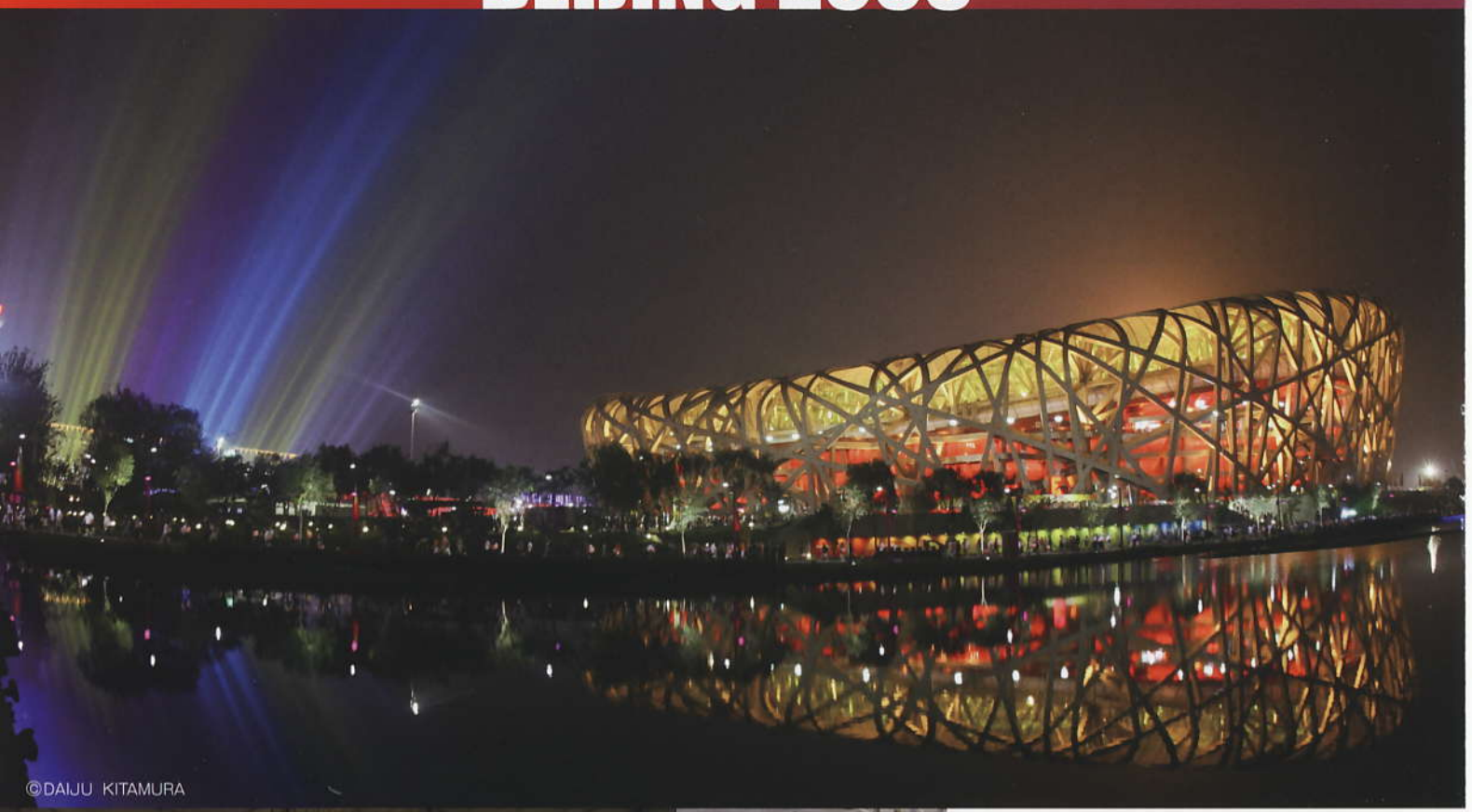
今でも、地下鉄の出口で見た光景を思い出す。あまりに早急な開発によって、地下鉄近辺の街は大きく変貌した。毎日使っていた駅の向こうに、壁とトタンで囲われた一角が見えた。下水がないから水溜りができ、洗濯物が干され、子供たちが裸足で遊んでいる。明らかに異質な空間に近づくと、公安に両側から制止された。

上を走る高速道路や列車から外国人に見られないように、トタン屋根をつけられた一角の横で、「ONE　WOLRD　ONE　DREAM」と書かれた大会スローガンが風にはためいている。そこは、スタジアムでも体育館でもない。しかし、北京五輪の「本質」の部分を、あれほど鮮やかなコントラストで描いたシーンはほかになかったと思う。オリンピックに空まで奪われた人々は、お祭りが終った今、どうしているのだろう、と時々考えている。

今回はメディア用の導線より、時間の計算ができる公共交通機関を使って移動することにした。「劉翔のための五輪」とまで言われた陸上のスーパースターが直前に棄権したシーンが地下鉄のライブ映像に流れた時、呆然とし、怒鳴り、涙を流す市民とそれを見た。大会の切符がなければ五輪公園内に入れないばかりか、会場に向かう地下鉄にさえ乗れず、肩を落として改札に座り込んでいた大勢の家族や子供たちの姿は、表彰台で涙する選手たちの姿と同じように、「北京五輪」として忘れることはないだろう。

FLASH BACK BEIJING 2008

BEIJING 2008

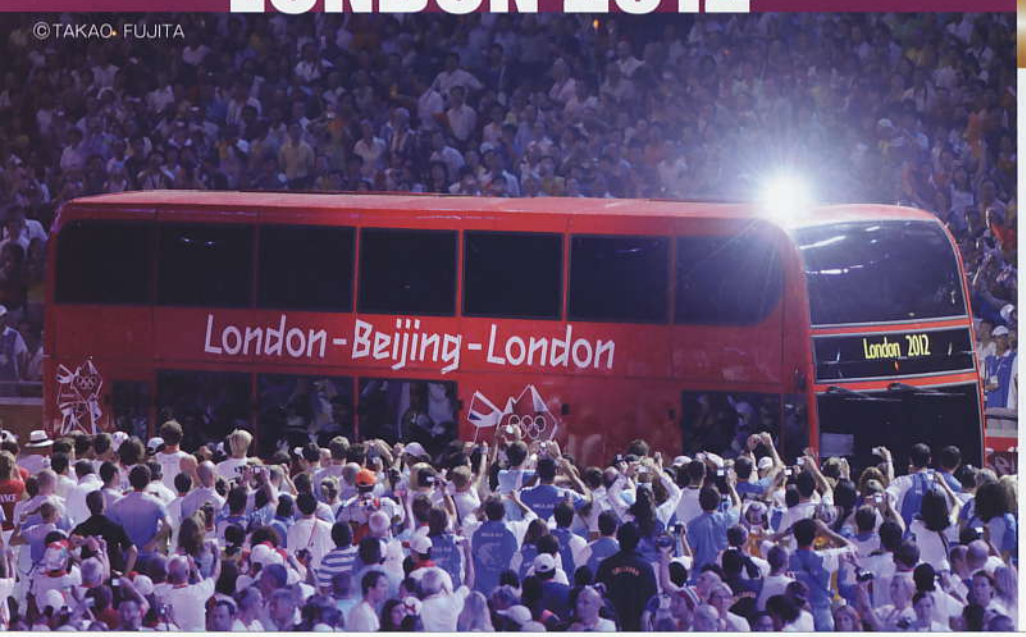


CHICAGO
2016 ?

MADRID
2016 ?

RIO DE JANEIRO
2016 ?

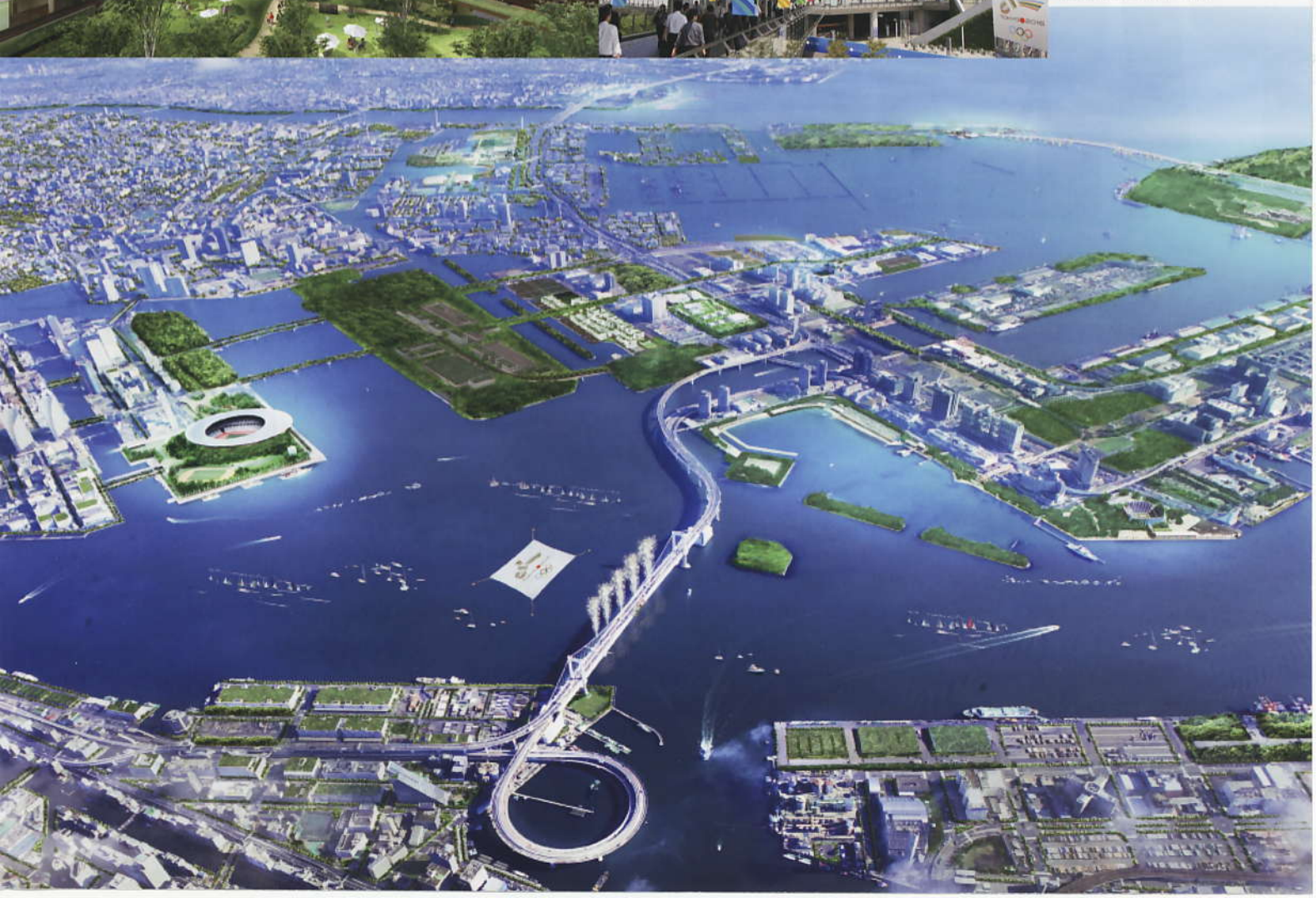
LONDON 2012



TOKYO 2016 !?

TOKYO 2016
CANDIDATE CITY

上／オリンピックスタジアム
中左／選手村
中右／メインプレスセンター
下／結びクラスター全景



五輪組織委員が初大きな意義を持った

文／宮崎恵理　Text：ERI MIYAZAKI

2008年9月6日－17日、北京パラリンピックが開催された。147の国と地域から約4千人の選手が出場する史上最大規模の大会となった。日本は、選手162名が17競技に参加し、金メダル5個を含むメダル全27個を獲得した。

今大会の大きな特徴は、2つある。1つ目は、世界の競技レベルが飛躍的に上がったことだ。

例えば、片足切断のナタリー・デュトワ（南アフリカ）は、先に行われた北京オリンピックのオープンウォーターに出場した後、続いてパラリンピックの競泳に出場。50m、100m、400m自由形と100mバタフライ、200m個人メドレーで5冠を達成した。また、陸上競技では、両ひざ下に義足を装着するオスカー・ピストリウス（南アフリカ）が、100m、200m、400mの3冠を達成。ピストリウスも一般の陸上競技に出場し、北京オリンピックを目指してきた。国際陸上競技連盟はピストリウスの義足が「バネなどの人工装置の着用を禁ずる」という規定から彼のオリンピック出場を不可としていたが、その後スポーツ仲裁裁判所から出場を認める裁定が出されていた。オリンピック直前の7月に行われた競技会でわずかに400mの標準記録に届かなかったためオリンピックへの出場を逃した。が、北京終了後、ピストリウスは再びロンドン・オリンピックを目指しているという。

デュトワやピストリウスの例からもわかる通り、パラリンピックの競技レベルは、今やオリンピックに迫る勢いなのである。

日本にも世界を席巻する選手が存在する。車いすテニスの男子シングルスで金メダルを獲得した国枝慎吾は、昨年、車いすテニスの4大大会を同一年に制する年間グランドスラムを達成し、世界ランキング1位で今大会に臨んだ。「4大大会は通過点。北京こそが大きな一つの頂点」と狙い定めてきたこの大会で、国枝は決勝までのトーナメント6試合をすべてストレートで勝利。しかも、1試合で落としたのは、わずか3ゲーム以下という圧勝だった。

また、自転車競技で今大会初出場した石井雅史は、元競輪選手。「トラック競技こそ、競輪選手の意地の見せ所」と臨んだ個人1kmタイムトライアルで、1分8秒771の世界新（2位は11秒台）で、ぶっちぎりの優勝を果たした。ロードでの練習中の交通事故により脳に高次機能障害を負った後、本格的に障害者の自転車競技をスタートさせてわずか2年の快挙である。

陸上競技ではプロのアスリートとしてスポーツマネージメントの会社に一般のプロ選手らと名を連ねている選手もいる。あるいは、オリンピック選手を輩出する有名企業の陸上部に籍をおき、実業団選手として活躍する人もいる。日本の障害者アスリートの世界も、競技環境やレベルは、近年、格段に上がってきたと言えるだろう。

しかし、それでも日本国内では、障害者のアスリートがオリンピック選手と並んで認知されることは、まだまだ少ない。

そんな中、オリンピック直前の6月に開催された自転車競技の「サイクルフェスタ」は、一つの画期的なイベントとなった。2日間にわたって東京ドームで行われ、BSでの放映や青山テルマなどの人気アーティストのミニライブまで開催されたこのサイクルフェスタは、自転車競技の普及を狙ったものだが、同時に日本代表選手の壮行会を兼ねている。このイベントに、オリンピック選手とともにパラリンピックの選手が登壇したのである。

この背景には、「08年の北京オリンピック開催時より、開催国のオリンピック組織委員会がパラリンピック開催のための組織・運営にも責任をもたなくてはいけない」という、IOCとIPC（国際パラリンピック委員会）の取り決めがある。06年のトリノ・パラリンピックまでは開催地は同じでも別の組織委員会によって運営されてきた。しかし、00年、当時のIOCサマランチ会長とIPCステッドワード会長の調印によって、この取り決めが決定。正式な施行が08年北京オリンピック開催時から、となっていたのだ。

これが、今大会のもう一つの大きな特徴である。北京は、オリンピック組織委員会が開催した初めてのパラリンピックとなった。

東京が2016年のオリンピック開催地の正式候補となってから、東京都は招致活動において「東京オリンピック・パラリンピック」と併記するようになった。招致ポスターには、オリンピックを想起させる体操やバレーボールなどの競技とともに、車いすバスケットのバージョンも並ぶ。

デュトワやピストリウスのように陸上競技や競泳などチャンスがあればオリンピックにも出場できるという種目もあるが、車いすテニスや車いすバスケのように、競技そのものがパラリンピック独自であるものは多い。競技レベルはオリンピックに迫る勢いがあっても、一つに統合されることはない。だからこそ、2大会が並ぶことの意義は大きい。そのことを改めて考えさせられた、北京パラリンピックだった。

©KAZUJI SHIMIZU

運営
北京大会

©KAZUJI SHIMIZU

©KAZUJI SHIMIZU

©KAZUJI SHIMIZU

FLASH BACK
BEIJING 2008

2009年主要スポーツ・カレンダー

4月

■サッカー
《国内》4月4、5日　J1第4節、J2第6節
4月10、11、12日　J1第5節、J2第7節
4月15日　J2第8節
4月17～19日　J1第6節、J2第9節
4月25、26日　J1第7節、J2第10節
4月29日　J1第8節、J2第11節
《国外＆国際大会》
4月8日　AFCチャンピオンズリーグ
4月22日　AFCチャンピオンズリーグ

■ビーチバレー
《国内》4月4、5日　JBVサテライト平塚大会(平塚市)
4月18、19日　JBVサテライト福岡大会(福岡市)
4月24、26日　ファイテンJBVツアー第1戦愛知オープン(会場未定)

■スケート(フィギュア)
4月16～19日　2009 ISUワールドチームトロフィー
(東京・代々木第一体育館)

■ゴルフ
4月2～5日　クラフト・ナビスコ選手権
(アメリカ合衆国・ミッションヒルズ)
4月9～12日　マスターズゴルフトーナメント
(アメリカ合衆国・オーガスタ・ナショナル)

■モータースポーツ
4月3～5日　F1マレーシアGP(セパン)
4月17～19日　F1中国GP(上海市)
4月24～26日　F1バーレーンGP(サキール)
4月26日　ロードレース世界選手権日本グランプリ
(栃木県・ツインリンクもてぎ)

■レスリング
4月4～5日　全日本女子レスリング選手権大会(駒沢体育館)

■柔道
4月4～5日　全日本選抜柔道体重別選手権大会
(福岡国際センター)
4月19日　全日本女子柔道選手権大会(横浜文化体育館)
4月29日　全日本柔道選手権大会(日本武道館)

■水泳
4月16～19日　第85回日本選手権水泳競技大会競泳競技
(静岡県浜松市)

■陸上競技
4月20日　ボストンマラソン
4月26日　ロンドンマラソン

■体操
4月25～26日　全日本体操競技選手権大会(代々木第一体育館)

■卓球
4月28日～5月5日　世界卓球選手権(横浜アリーナ)

5月

■サッカー
《国内》5月2日　J1第9節、J2第12節
5月5日　J1第10節(7月1日、2試合)、J2第13節
5月9、10日　J1第11節、J2第14節
5月16、17日　J1第12節、J2第15節
5月20日　J2第16節、ナビスコカップ予選リーグ
5月23、24日　J1第13節、J2第17節
5月28、30日　J2第18節、ナビスコカップ予選リーグ
《国外＆国際大会》
5月6日　AFCチャンピオンズリーグ
5月20日　AFCチャンピオンズリーグ
5月20日　UEFAカップ決勝
5月27日　UEFAチャンピオンズリーグ決勝(イタリア・ローマ)
AFCチャンピオンズリーグ　ラウンド16WEST

■バレーボール
《国内》5月上旬　第58回黒鷲旗　全日本男女選抜大会
(大阪府立体育会館大阪＝予定)

■ビーチバレー
5月2、3日　ファイテンJBVツアー第2戦東京オープン予選
(東京お台場)
5月4、6日　ファイテンJBVツアー第2戦東京オープン
(東京お台場)
5月15～17日　ファイテンJBVツアー第3戦霧島酒造オープン
(都城市)

■自転車競技
《国内》5月17～24日　ツアー・オブ・ジャパン(大阪府堺市～東京都)
5月28～31日　ツール・ド・熊野(紀伊半島)
《国外＆国際大会》
5月9～31日　ジロ・デ・イタリア(イタリア)

■競馬
5月2日　ケンタッキーダービー(アメリカ合衆国)
5月3日　天皇賞・春(京都競馬場)
5月31日　日本ダービー(東京競馬場)

■モータースポーツ
5月8～10日　F1スペインGP(バルセロナ)
5月21～24日　F1モナコGP(モンテカルロ)
5月24日　IRLインディ500(アメリカ合衆国)

■陸上競技
5月9日　IAAFグランプリ大阪大会(大阪市長居陸上競技場)

■相撲
5月10～24日　大相撲五月場所(両国国技館)

■テニス
5月24日～6月7日　全仏オープン(フランス・パリ)

6月

■サッカー
《国内》6月3日　J2第19節、ナビスコカップ
6月7、9日　J2第20節、ナビスコカップ
6月13、14日　J2第21節、ナビスコカップ
6月20、21日　J1第14節、J2第22節
6月24日　J2第23節
6月27、28日　J1第15節、J2第24節
《国外＆国際大会》
6月6日　ワールドカップ・アジア最終予選　vsウズベキスタン
(ウズベキスタン)
6月10日　ワールドカップ・アジア最終予選　vsカタール(横浜)
6月17日　ワールドカップ・アジア最終予選　vsオーストラリア
(オーストラリア)
6月14～28日　FIFAコンフェデレーションズカップ(南アフリカ)
6月24日　AFCチャンピオンズリーグ　ラウンド16EAST

■バレーボール
《国外＆国際大会》
6月13、14日　男子・ワールドリーグ　インターコンチネンタルラウンド
(所沢市民体育館)
6月19～21日の内2日間
男子・ワールドリーグ　インターコンチネンタルラウンド
(ブルガリア)
6月27、28日　男子・ワールドリーグ　インターコンチネンタルラウンド
(富山市総合体育館)

■バスケットボール
《国外＆国際大会》
6月予定　東アジア選手権大会 兼FIBAアジア男子選手権大会
東アジア地区予選(未定)
6月21～28日　FIBAアジア女子選手権大会(チャイニーズ・タイペイ)

6月

■テニス
6月22日~7月5日 ウインブルドン選手権(イギリス)

■モータースポーツ
6月5~7日 F1 トルコ GP(イスタンブール)
6月13~14日 ル・マン 24 時間レース(フランス)
6月19~21日 F1 イギリス GP(シルバーストン)

■競馬
6月6日 エプソムダービー(イギリス)

■ゴルフ
6月11~14日 日本プロゴルフ選手権(北海道・恵庭ゴルフクラブ)
6月11~14日 全米女子プロゴルフ選手権(ブルロック)
6月18~21日 全米オープン(ベスページ)

■陸上競技
6月25~28日 日本陸上競技選手権大会(広島広域公園陸上競技場)

■レスリング
6月20~21日 全日本選抜レスリング選手権大会
(東京・代々木第二体育館)

7月

■サッカー
《国内》7月2、4、5日 J1 第 16 節、J2 第 25 節
7月8日 J2 第 26 節
7月11、12日 J1 第 17 節、J2 第 27 節
7月15日 ナビスコカップ準々決勝第1戦
7月17、18、19日 J1 第 18 節、J2 第 28 節
7月22日 J2 第 29 節
7月25、26日 J1 第 19 節、J2 第 30 節
7月29日 ナビスコカップ準々決勝第2戦

■バレーボール
《国外&国際大会》
7月4、5日 男子・ワールドリーグ インターコンチネンタルラウンド
(東京・有明コロシアム)
7月10~12日の内2日間
男子・ワールドリーグ インターコンチネンタルラウンド
(ロシア)
7月15~18日の内2日間
男子・ワールドリーグ インターコンチネンタルラウンド
(キューバ)
7月22~26日 男子・ワールドリーグ ファイナルラウンド
(場所未定)

■ビーチバレー
《国内》7月25~26日 ザ・ビーチ(仮 神奈川県藤沢市鵠沼海岸)
7月4~5日 JBV サテライト神津島大会
(東京都神津島村前浜海岸)

■バスケットボール
《国内》7月28日~8月3日 全国高等学校総合体育大会(大阪)
《国外&国際大会》
7月2~12日 U-19 男子世界選手権大会(ニュージーランド)
7月2~9日 アジアユースゲームズ(シンガポール)
7月23日~8月2日 U-19 女子世界選手権大会(タイ)

■自転車競技
7月4~26日 ツール・ド・フランス(フランス)
7月20~26日 BMX 世界選手権(オーストラリア・アデレード)

7月

■ゴルフ
7月9~12日 全米女子オープン(ソーコンバレー)
7月16~19日 全英オープン(ターンベリー)
7月30日~8月2日 全英女子オープン
(ロイヤルリザム・アンド・セントアンズ)

■モータースポーツ
7月10~12日 F1 ドイツ GP(ホッケンハイム)
7月24~26日 F1 ハンガリー GP(ブダペスト)
7月26日 鈴鹿8時間耐久ロードレース
(三重県・鈴鹿サーキット)

■相撲
7月12~26日 大相撲七月場所(愛知県体育館)

■水泳
7月18日~8月2日 2009 年世界水泳選手権(イタリア・ローマ)

■その他
7月15~26日 第25回夏季ユニバーシアード
(セルビア・ベオグラード)
7月28日~8月20日 全国高等学校総合体育大会(奈良県ほか5府県)

8月

■サッカー
《国内》8月1、2日 J1 第 20 節、J2 第 31 節
8月5日 J2 第 32 節
8月8日 JOMO カップ日韓オールスター(韓国)
8月8、9日 J2 第 33 節
8月15、16日 J1 第 21 節、J2 第 34 節
8月19日 J1 第 22 節
8月22、23日 J1 第 23 節、J2 第 35 節
8月29、30日 J1 第 24 節、J2 第 36 節

■バレーボール
《国外&国際大会》
8月7~9日 女子・ワールドグランプリ予選ラウンド
(大阪市中央体育館予定)
8月14~30日の内3日間
男子・2010 年世界選手権予選(場所未定)
8月19~23日 女子・ワールドグランプリファイナルラウンド
(東京体育館)

■ビーチバレー
《国内》8月1、2日 JBV サテライト大会(会場未定)
8月6~9日 全日本ビーチバレージュニア選手権
(大阪府阪南市箱作海水浴場)
8月13~16日 マドンナカップ in 伊予市ビーチバレージャパン
女子ジュニア選手権大会
(愛媛県伊予市五色姫海浜公園)
8月13~16日 第23回ビーチバレージャパン&MasterCard
マーメイドカップ(仮 神奈川県藤沢市鵠沼海岸)
8月20~23日 ビーチバレージャパンレディース2009
(大阪府泉南郡淡輪海水浴場)
8月28~30日 ファイテン JBV ツアー第4戦東京オープン
(仮 会場未定)

■バスケットボール
《国外&国際大会》
8月6~16日 FIBA アジア男子選手権大会(中国)

8月

■陸上競技
《国外＆国際大会》
8月15~23日　世界陸上選手権ベルリン大会(ドイツ)

■自転車競技
《国外＆国際大会》
8月7~15日　ジュニア世界選手権(ロシア・モスクワ)
8月23日　MTBマラソン世界選手権
(オーストラリア・キャンベラ)
8月29日~9月20日　ブエルタ・ア・エスパーニャ(スペイン)

■野球
8月8~22日　第91回全国高等学校野球選手権大会
(阪神甲子園球場)

■ゴルフ
8月13~16日　全米プロゴルフ選手権
(ヘーゼルティンナショナル)

■モータースポーツ
8月21~23日　F1ヨーロッパGP(スペイン・バレンシア)
8月28~30日　F1ベルギーGP(スパ・フランコルシャン)

■柔道
8月26~30日　世界柔道選手権(オランダ・ロッテルダム)

9月

■サッカー
《国内》9月~2010年1月1日　第89回天皇杯
9月2日　J2第37節、ナビスコカップ準決勝第1戦
9月6日　J2第38節、ナビスコカップ準決勝第2戦
9月12、13日　J1第25節、J2第39節
9月19、20日　J1第26節、J2第40節
9月23日　J2第41節
9月26、27日　J1第27節、J2第42節
《国外＆国際大会》
9月5日　ワールドカップ・アジアプレーオフ第1戦
9月9日　ワールドカップ・アジアプレーオフ第2戦
9月23日　AFCチャンピオンズリーグ　準々決勝第1戦
9月30日　AFCチャンピオンズリーグ　準々決勝第2戦
9月25日~10月16日　FIFA　U-20ワールドカップ(エジプト)

■バレーボール
《国内》9月~12月　天皇杯・皇后杯　全日本選手権大会
《国外＆国際大会》
9月5~13日　女子・第15回アジア選手権(ベトナム・ハノイ)
9月18~27日　男子・第15回アジア選手権(フィリピン・マニラ)

■ビーチバレー
《国内》9月4~6日　ファイテンJBVツアー第5戦岡山オープン
(会場未定)
9月19~21日　ふくいカップJBVグランドスラム おおい大会
(福井県大飯郡おおい町長井浜海水浴場)
9月28~30日　トキめき新潟国体(新潟県上越市直江津海岸)

■自転車競技
《国内》9月9~13日　ツール・ド・北海道(北海道)
《国外＆国際大会》
9月1~6日　MTB世界選手権(オーストラリア・キャンベラ)
9月23~27日　ロード世界選手権(スイス・メンドリシオ)

9月

■体操
9月8~13日　第29回世界新体操選手権(三重県営サンアリーナ)

■ゴルフ
9月10~13日　日本女子プロゴルフ選手権
(岐阜関カントリー倶楽部東)

■モータースポーツ
9月11~13日　F1イタリアGP(モンツァ)
9月25~27日　F1シンガポールGP(シンガポール)

■相撲
9月13~27日　大相撲九月場所(両国国技館)

■陸上
9月20日　ベルリンマラソン

■レスリング
9月21~27日　レスリング世界選手権(デンマーク・ヘルニング)

■その他
9月26日~10月6日　第64回トキめき新潟国体本大会(新潟県)

10月

■サッカー
《国内》10月3、4日　J1第28節、J2第43節
10月7日　J2第44節
10月17、18日　J1第29節、J2第45節
10月21日　J2第46節
10月24、25日　J1第30節、J2第47節
《国外＆国際大会》
10月10日　ワールドカップ予選　アジア・オセアニアプレーオフ第1戦
10月21日　AFCチャンピオンズリーグ準決勝第1戦
10月24日~11月15日　FIFA U-17ワールドカップ(ナイジェリア)
10月28日　AFCチャンピオンズリーグ準決勝第2戦

■バスケットボール
《国内》10月2日~2010年4月15日　JBL2009-2010(全国各地)
10月3日~2010年3月4日　Wリーグ(全国各地)
《国外＆国際大会》
10月21~29日　FIBAアジアU-16女子選手権大会(開催地未定)

■スケート(フィギュア)
《国外＆国際大会》
10月15~18日　ISUグランプリ　トロフィー・エリックボンパール
(フランス・パリ)
10月22~25日　ISUグランプリ　カップオブロシア
(ロシア・モスクワ)
10月29日~11月1日　ISUグランプリ　カップオブチャイナ(中国・北京)

■スケート(スピード)
《国内》10月　全日本距離別スピードスケート選手権大会

■スケート(ショートトラック)
《国内》10月　全日本距離別選手権大会

■モータースポーツ
10月2~4日　F1日本グランプリ(鈴鹿サーキット)
10月16~18日　F1ブラジルGP(インテルラゴス)
10月30日~11月1日　F1アブダビGP(UAE・ヤス島)

■競馬
10月4日　凱旋門賞(フランス)

■体操
10月12~18日　世界体操競技選手権(イギリス・ロンドン)

■ゴルフ
10月1~4日　日本女子オープンゴルフ選手権競技
(千葉県・我孫子ゴルフ倶楽部)
10月15日　日本オープンゴルフ選手権競技
(埼玉県・武蔵カントリークラブ豊岡)

11月

■サッカー
《国内》11月3日　ナビスコカップ決勝(東京・国立競技場)
11月8日　J1第31節、J2第48節
11月21、22日　J1第32節、J2第49節

2009年主要スポーツ・カレンダー

11月

11月28、29日　J1第33節、J2第50節

《国外＆国際大会》
- 11月7日　AFCチャンピオンズリーグ決勝（東京・国立競技場）
- 11月14日　ワールドカップ予選　アジア・オセアニアプレーオフ第2戦
- 11月14日　2011AFCアジアカップ予選　vs香港（日本・会場未定）
- 11月18日　2011AFCアジアカップ予選　vs香港（香港）

■バレーボール

《国外＆国際大会》
- 11月10～12日　女子・ワールドグランドチャンピオンズカップ（東京体育館）
- 11月14、15日　女子・ワールドグランドチャンピオンズカップ（マリンメッセ福岡）
- 11月18、19日　男子・ワールドグランドチャンピオンズカップ（大阪市中央体育館）
- 11月21～23日　男子・ワールドグランドチャンピオンズカップ（名古屋・日本ガイシホール）

■バスケットボール

《国内》11月上旬～5月上旬　bjリーグ（全国各地）
- 11月23～29日　全日本大学選手権大会／女子（東京）

《国外＆国際大会》
- 11月19～29日　FIBAアジアU-16男子選手権大会（マレーシア）

■陸上競技

《国内》
- 11月1日　全日本大学駅伝対校選手権大会
- 11月15日　第1回横浜国際女子マラソン（横浜）

■スケート（フィギュア）

《国外＆国際大会》
- 11月5～8日　ISUグランプリ NHK杯国際フィギュアスケート競技大会（長野）
- 11月12～15日　ISUグランプリ　スケートアメリカ（アメリカ・レイクプラシッド）
- 11月19～22日　ISUグランプリ　スケートカナダ（カナダ・キッチナー）

■競馬
- 11月1日　天皇賞・秋（東京競馬場）
- 11月29日　ジャパンカップ（東京競馬場）

■剣道
- 11月3日　全日本剣道選手権（日本武道館）

■体操
- 11月7～15日　トランポリン世界選手権（ロシア・サンクトペテルブルク）

■テニス
- 11月8～15日　全日本テニス選手権（東京都・有明テニスの森公園）

■柔道
- 11月14、15日　講道館杯全日本柔道体重別選手権大会（千葉ポートアリーナ）

■相撲
- 11月15～29日　大相撲十一月場所（福岡国際センター）

■その他
- 日程未定　第3回アジア室内競技大会（ベトナム・ハノイ）

12月

■サッカー

《国内》12月5日　J1第34節、J2第51節

《国外＆国際大会》
- 12月予定　FIFAクラブワールドカップ2009（UAE・ドバイ）

■バレーボール

《国内》12月～2010年4月　V・プレミアリーグ2009／2010シーズン（全国各地）
- 12月上旬　スーパーカレッジ　大学選手権（東京他）

■バスケットボール

《国内》
- 12月23～29日　全国高等学校選抜優勝大会（東京）
- 12月2～6日　全日本大学選手権大会／男子（大阪）

《国外＆国際大会》
- 12月2～11日　東アジア競技大会（ホンコン・チャイナ）

■スケート（フィギュア）

《国内》12月　全日本選手権大会

《国外＆国際大会》
- 12月3～6日　ISUグランプリ シニア／ジュニアグランプリ　ファイナル（東京）

■スケート（スピード）

《国内》12月　全日本スプリントスピードスケート選手権大会

■スケート（ショートトラック）

《国内》12月　全日本選手権大会

■ゴルフ
- 12月3～6日　日本シリーズ（東京よみうりカントリークラブ）

■陸上競技
- 12月6日　福岡国際マラソン

■レスリング
- 12月21～23日　全日本レスリング選手権大会（東京都・代々木第2体育館）

■競馬
- 12月27日　有馬記念（中山競馬場）

P28. ゴルフ／©TOSHIMITSU WADA
P29. バレー／©TAKAO FUJITA
P29. シンクロナイズドスイミング／©TAKAO FUJITA
P30. 自転車競技／©YUZURU SUNADA
P31. 相撲／©KYOJI IMAI
P31. バスケットボール／©YOSHIO KATO

世界選手権5人出場の意義

文／寺田辰朗　Text：TATSUO TERADA

北京五輪で20年ぶりにメダルゼロに終わった女子マラソン。今年の世界陸上ベルリン大会では、その立て直しが注目される。

だが、いきなり金メダルを期待するのは、外野の身勝手というものだろう。野口みずきや高橋尚子レベルの選手が、簡単に現れるものではない。今は、世界で戦える選手の芽を育てる時期なのだ。

その意味で、五輪より2人多い代表を送り込める世界陸上は、選手層の厚い日本にとっては活用価値が高い。選考システムも五輪と違い、東京、大阪、名古屋の日本人トップ選手は自動的に代表に内定する。

11月の東京では尾崎好美(第一生命)が2時間23分30秒で優勝。前日本記録保持者の渋井陽子（三井住友海上）を終盤で逆転した。指導するのは、91年の世界陸上東京大会銀メダリストの山下佐知子監督。

「第一生命は今でも監督の方が注目されます。メダルを取って、選手が注目されるようになります」(尾崎)

大阪では渋井が、異例といえる69日のインターバルで再挑戦し、2時間23分42秒で優勝した。自分のペースで飛ばすのが渋井の特徴だが、大阪ではスローペースの前半を、集団の中でひたすら我慢。30km手前でスパートすると、後半をハーフマラソンなみのスピードで2位以下を圧倒した。すでに30歳。

「ここまで来たら私もメダルが欲しい」

今の日本選手では最も爆発力がある。

3人目の代表は名古屋の日本人トップが自動的に決まる。残る2枠のうち1つは、東京、大阪、名古屋の3大会の2位以下から選ばれる。現時点での候補は東京2位の加納由理（セカンドウィンドAC）と、大阪2位の赤羽有紀子(ホクレン)だ。

加納はインカレに優勝したエリート選手だが、資生堂在籍時から指導する川越学監督が長期的視野で育成してきた。年齢的には野口、渋井と同じ30歳だが、これからピークを迎えそうな雰囲気がある。

29歳の赤羽は日本の陸上界では初と言われているママさん代表選手。北京五輪はトラックで出場したスピードランナーだ。渋井にこそ敗れたが、大阪でマラソンへの適性が高いことは示した。

「子供を産んでなかったら、ここまで気持ちが充実していなかった」。母親の強さをが加わり、世界を狙う力をつけた。

5人目は上記3大会と昨年8月の北海道に加え、4月の海外マラソンで好成績を挙げた選手も選考対象になる。この点が世界陸上でも初めての試みだ。国内の選考レースでは、結果を気にして思い切った走りができない選手も多い。より多くの選手に機会を与えた選考システムから、どんな選手が代表入りするかも注目される。

ADカード発行で緩和された取材規制

文／宮崎恵理　Text : ERI MIYAZAKI

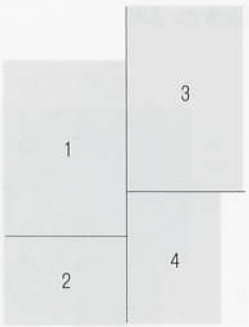
2008 年 5 月。バレーボールの北京オリンピック最終予選が東京で行われ、男子が16年ぶりの出場権を獲得し、男女そろって北京オリンピック出場を決めた。その大事な大会終了のタイミングを見計らい、バレーボール部会は、日本スポーツプレス協会（AJPS）の国内担当理事とともに初めて部会として、日本バレーボール協会、中間法人Vリーグ機構、そしてビーチバレーの国内ツアー運営を担う株式会社キューを来訪した。

これまでもバレーボールについては、AJPSの会員証を写真つきIDカードとして、当日の取材申請が認められている大会はあった。AJPSが慣例的に認識されていたわけである。しかし、近年、国際大会の開催・運営規模がより拡大されたことや、メディアを騙って入り込んだ人間による赤外線などの特殊撮影や立ち入り禁止区域での盗撮などのトラブルが相次ぎ、報道規制が厳重になってきたという経緯がある。こういう時代だからこそ、AJPSのメンバーであることの意義を訴求したいというのが、来訪の大きな目的だった。

この結果、日本Vリーグ機構からAJPSで事前申請を行えば、媒体予定がない場合でも、年間の取材 AD カードが発行されることが決定。実際、11月の開幕までに、バレーボール部会をふくむ19名のAJPS会員にADカードが発行されたのだった。

Vリーグは、バレーボールにおける日本のトップリーグであり、代表選手のほとんどが、このリーグで活躍する選手から選出される。新たなジャーナリストがバレーボールを取材できるようになれば、バレーボールそのものがさらに拡大・普及することにもつながるかもしれない。

以前より陸上競技においては AJPS 枠における取材申請が可能だった。陸上競技取材経験の豊富な先輩会員が、こうした道を切り開いてきた成果である。AJPS における部会意義の一つに、こうした会員全体への取材活動サポートがあげられる、と考える。Vリーグへの AD カードが、バレーボール部会の大きな初めの一歩になれば、幸甚である。



1．渋井陽子
2．赤羽有紀子
3．V・プレミアリーグ女子／栗原 恵
4．V・プレミアリーグ男子／清水邦広

国際舞台に続く2009年に！

文／小永吉陽子　Text：YOKO KONAGAYOSHI

2008年のバスケットボール界は停滞の1年だった。女子はオリンピック世界最終予選で敗退し、アテネ大会に続くオリンピック出場はならず。男子は07年のアジア予選で史上最悪の8位となったために、世界最終予選の切符すらつかめずにいた。アジア予選以後、日本代表のヘッドコーチは空席のまま。08年は代表活動すらも行われなかった。

そんな中で唯一、明るい話題を振りまいたのが、日本人初のNBA（米国プロリーグ）選手である田臥勇太の6年ぶりのJBL（日本バスケットボールリーグ）復帰と、大神雄子のWNBA（米国女子プロリーグ）チャレンジだろう。

田臥は173cmと小柄ながら、スピードを生かしたイマジネーションあふれるプレイで、04年にNBAの公式戦に4試合出場。NBAを解雇されてからの4年間はマイナーリーグで活動しながら、NBA復帰のチャンスをうかがっていた。「明るい話題」と書いたのは、NBA挑戦をあきらめた失意の帰国ではないからだ。田臥は日本でプレイすることを「NBA挑戦の一環」だと位置づけている。すでにアメリカでは田臥のプレイスタイルは知れ渡っている。NBAに再昇格するには「日本で出場時間を確保し、個人成績を残してアピールすることが重要」と考えたからだ。

田臥が所属するリンク栃木ブレックスは、今季JBLに昇格した若いチーム。帰国当初は日本のチームプレイに馴染めなかった田臥だが、いまやすっかりチームの顔として、プレイオフ争いに絡む原動力となった。また、田臥効果は集客面にも絶大な力を発揮し、リンク栃木の試合は常に満員。田臥一人の存在が、JBLに新風を巻き起こしている。

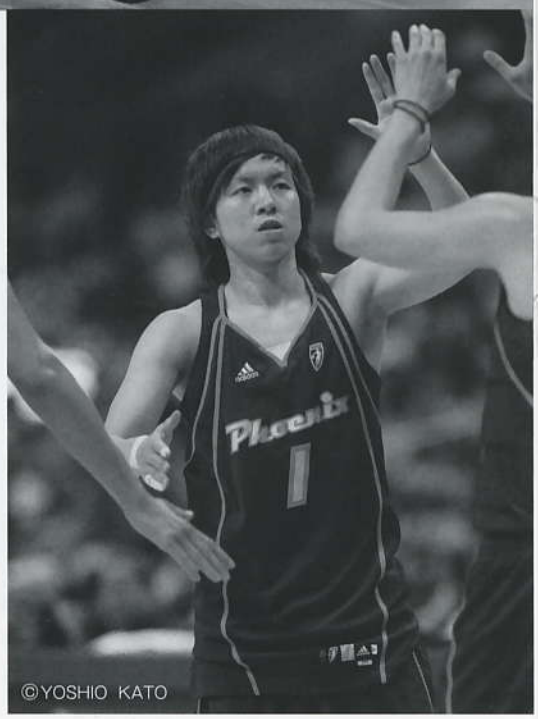
大神（おおが）雄子は昨シーズン、日本人で2人目のWNBAプレイヤーとなった。控え選手ながら、1シーズンを通して戦ったことは快挙でもある。現在は所属チームのJOMOに戻り、アメリカで培ったリーダーシップをいかんなく発揮している。2人が世界で得た経験は、バスケットボール後進国の日本にとって、大きな影響力をもたらしているのだ。2人は実体験から口を揃えて訴える。

「若いうちから海外に出てプロ意識をつけよ！」

他競技では当たり前のように進んでいる海外進出だが、バスケットボールでは道は険しいと言える。日本代表クラスの海外進出が難しいのであれば、若いうちから武者修行に送り出すシステムや、若い世代の国際交流の場を日本協会が構築すべきだろう。

今年、1年半の空白を経て、男子は日本代表の活動が再開。女子は前回逃した世界選手権に向けてスタートを切る。再出発の2009年、日本のバスケットボール界のパイオニアである田臥勇太、大神雄子の声と経験を無駄にしてほしくない。

©YOSHIO KATO



©YOSHIO KATO

1．JBL リンク栃木ブレックス、田臥勇太
2．WNBA フェニックス・マーキュリー、大神雄子
3．ジャパンラグビートップリーグ開幕戦／サンヨー vs. サントリー
4．マイクロソフトカップ決勝／東芝 vs. サンヨー

全体の底上げがうかがえた2008-09

文／井田新輔　Text：SHINSUKE IDA

2月8日、ジャパンラグビートップリーグ2008～09年度シーズンを締めくくる上位4チームで行われるプレーオフトーナメント、マイクロソフトカップ決勝戦は東芝ブレーブルーパスが三洋電機ワイルドナイツを17対6で破り、2年ぶり4度目のシーズンチャンピオンの座についた。

今年度優勝の東芝の強さはブレイクダウンの激しさとともに、選手のゲームに対する理解度と集中力の高さが上げられる。

今シーズン、ニュージーランドよりFLスティーブン・ベイツ、SOデイビット・ヒルが加入し、12年目のFL渡邊泰憲、若手のNo8豊田真人、CTB仙波智裕たちを中心に展開されたチーム内の競争がチーム力の底上げにつながり、9節鹿児島での神戸製鋼コベルコスティーラーズ戦に敗れたもののシーズン終盤のサントリーサンゴリアス、三洋電機との上位対決を大差で制し、12勝1敗の首位でシーズンを終えマイクロソフトカップの出場権を獲得した。

昨年の日本選手権で悲願の単独優勝を果たした三洋電機ワイルドナイツは来日5年目の元オールブラックスSOトニー・ブラウン、No8ホラニ龍コリニアシをチームの柱に昨年マイクロソフトカップ、日本選手権と2度の決勝で対戦したサントリーとの今季開幕戦で勝利を収め、順調に勝ち星を重ねたがシーズン中盤にチームの大黒柱ブラウンをはじめ負傷者が続出するアクシデントに見舞われた。

だが日本代表にも選出された3年目のSO入江順和、ルーキーのPR川俣直樹がその穴を埋める活躍を見せ無敗をキープしたものの、最終節の東芝戦で苦杯を喫し勝ち点1の差でシーズン2位となった。

昨年のマイクロソフトカップの覇者サントリーサンゴリアスは、補強の目玉としてワラビーズのキャプテンとして2度のワールドカップに出場したSHジョージ・グレーガンが加入したものの、昨年と比べ安定感が欠ける戦いぶりでシーズン3敗を喫し3位にとどまり、マイクロソフトカップでも準決勝で姿を消した。

4位の神戸製鋼コベルコスティーラーズ以下最終戦まで、節ごとに順位が入れ替わる拮抗した試合が多い今シーズンであったが、印象に残るチームとして4年ぶりにトップリーグ再昇格を果たした近鉄ライナーズを挙げたい。

知将ピーター・スローンがヘッドコーチに就任した今年、昇格チーム同士の対決となった開幕戦の横河武蔵野アトラスターズ戦を快勝で飾ったのち東芝、神戸製鋼など上位チームとも接戦を演じ今季5勝を挙げ、05年度以降入替戦昇格チームとして最高の9位でシーズンを終えた。

トップリーグ6年目を迎えた今年、ゲーム前に選手が観客と握手を通してコミニュケーションをはかる「シェイクハンズキャンペーン」、親子で参加できるタグラグビー教室などファン獲得のいろいろなイベントが今季も引き続いて行われ、それが功を奏し38万4,954人という過去最高の観客動員を記録し、特に三洋電機のホームとなる群馬県太田競技場、近鉄の本拠地花園ラグビー場にはリーグ屈指の多くの熱いサポーターが足を運び、声援を送った。

昨秋以降の景気の後退がスポーツの世界にも影響を及ぼしているがラグビーも例外ではなく、2006年度シーズンまでトップリーグに名を連ねた関西の名門ワールドファイティングブルス、セコムラガッツもシーズン終了後来季以降の活動内容の縮小が発表された。

また東芝に所属する選手の2度にわたる不祥事のように、チームと選手のモラルを問われる残念なニュースも報じられた。

僅差の試合が増え、全体のレベルアップがうかがえた2008～09シーズンであったが、ジャパンラグビートップリーグにはこれからも多くのファンの支持を集めるとともに、日本ラグビーの原動力となる積極的な展開に期待したい。

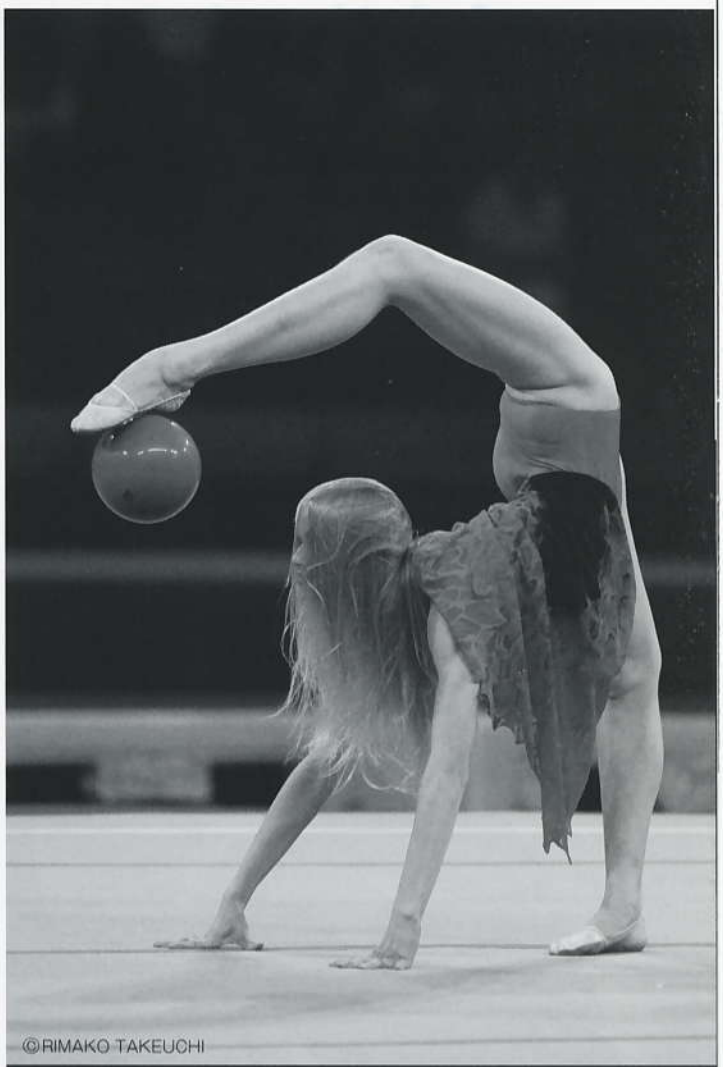
大会開催に変革

文／竹内里摩子　Text：RIMAKO TAKEUCHI

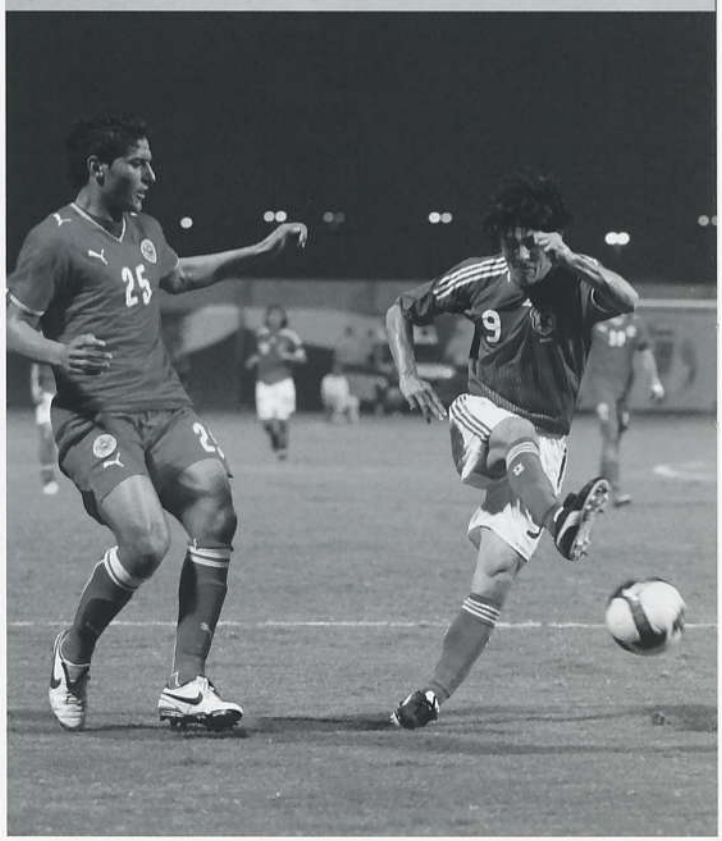
財団法人日本体操協会は、体操競技の全日本選手権大会において、今年から分離開催を実施する事になりました。従来ですと、11月に全日本選手権大会が開かれ「個人総合」・「種目別」・「団体総合」の3タイトルを3日間という短期間で争っていました。今年から「個人総合」を4月に、「種目別」・「団体総合」を11月に開催します。なぜ時期をずらして全日本を分離開催するかですが、主に以下の事を踏まえた協会の考えからです。

【1】3日連続の競技日程は、10点満点廃止になったルールでは選手に想像以上の負担をかけている。【2】失敗の許されない6－3－3の競技経験を、いいコンディションで経験させたい。【3】よりエキサイティングで強化につながることを前提とした、観客が楽しめる競技方式を探したい……というものです。確かに、五輪・世界選手権でも3日間連続の競技日程は組まれていません。選手の負担軽減により、疲れによる怪我も防止出来るでしょう。スペシャリストの出現の可能性も広げていけます。また、観戦する側もより集中して競技を楽しめる等、利点も多くなる事でしょう。10月に世界選手権が行われ、6月には世界選手権最終選考会とNHK杯、4月に全日本個人総合と世界選手権2次選考会があります。選手の精神的・肉体的な負担軽減で健康管理を考え、コンディションの良い状態で世界に攻め込む「体操ニッポン」のさらなる強化を図る！　体操競技の全日本分離開催は、そんな想いが込められているのではないでしょうか。

また、新体操においては、第29回世界新体操選手権が9月8日（火）～13日（日）三重県営サンアリーナ（伊勢市朝熊町）にて開催されます。同会場は、2006年に新体操ワールドカップファイナル三重大会も行われています。ちなみにさかのぼる事、第1回目の世界新体操選手権は1936年ブタペスト大会（ハンガリー）で開催され、日本は1969年第4回バルナ大会（ブルガリア）に初参加をしています。また、過去2回を除いてすべてヨーロッパでの開催であり、アジアでは1999年の大阪大会に続く2回目となります。よって、今後日本で世界新体操選手権が開催される確率としてはとても低くなるのではないかと思われます。この三重大会は、そんな貴重な大会でもありますのでぜひ足を運んで頂きたいと思います。日本は、団体・個人とも出場します。団体は、フェアリージャパンポーラ（北京五輪出場のメンバー）が既に代表に決定しており、個人は5月に世界新体操選手権2次選考会が、そして6月に世界新体操選手権選考会が行われ、決まります。



©RIMAKO TAKEUCHI



1

2

3

1．オルガ・カプラノワ（ロシア）
2．アンナ・ベッソノワ（ウクライナ）
3．アジアカップ予選／バーレーン vs. 日本

新たな対応や発想が必要

文／飯塚健司　Text：KENJI IIZUKA

世界経済の悪化が、スポーツ界に悪影響をもたらしている。サッカー界も例外にもれず、欧州のビッグクラブでさえ苦しい経営を強いられている。ここ数年、選手補強に巨額の投資をしていたプレミアリーグのチェルシーでさえ、ロシア人オーナーのロマン・アブラモビッチが株価の暴落で大幅な損失を出し、サイフにきつくヒモをかけている。今後しばらくは大型補強を行うのはムリだ。

日本国内では、なでしこリーグ1部の「TASAKI ペルーレ FC」が休部となった。池田浩美、山本絵美、大谷未央、坂口夢穂、下小鶴綾など多くの日本代表経験者を抱える強豪チームだったが、田崎真珠株式会社が経営＆事業の見直しを図るなか、サッカー部の活動が停止された。多くの選手が他チームに移籍したが、池田、下小鶴など数名は引退を決意した。チーム運営には多くの人々が関わっている。退社、転職、休職など大きな決断を迫られたのは、選手だけではなかったはずだ。

取材するわれわれの身近でも、次々と変化が起きている。出版業界の低迷に社会全体を覆う未曾有の不況が重なり、ここ数年で多くの総合スポーツ誌、サッカー誌が書店から消えていった。『SPORTS Yeah!』(角川書店)。『VS.』(光文社)。『Footival』(ソニー・マガジン)。『ATHRA』(毎日コミュニケーションズ)。『サッカー J+』(エンターブレイン)。『J's サッカー』(ニューズ出版)。ここに列挙したのは一部であり、フリーランスのライター、カメラマンであれば、この1年、2年の間に誰もが記事や写真の提供先を失った経験があるはずだ。

雑誌ばかりではない。1月28日に行われた日本代表のバーレーン戦は1998年2月のオーストラリア戦以来、11年ぶりに TV で生中継されなかった。メディアでの露出が減るのは、その競技にとってマイナスでしかない。取材される側はオフィシャルのホームページやブログで自己発信するだけでなく、メディアを使っていかに多くの人々に話題を提供するか、今後は新たな対応が求められる。

一方、取材するわれわれも既存の媒体にとらわれることなく、新たな発想で記事や写真の発表を行っていく方法を考えていかなければならない。 J リーグバブルに続いて、日本代表バブルもはじけた。受け身の態勢でいては、とても乗り切れない“負”の波がサッカー界に押し寄せている。取材される側に、取材する側。どちらも自らアクションを起こさなければならない状況を迎えている。

トラックレーサーの乗り味が格別なのはわかるけど……

文／設楽淳子　Text：JUNKO SHITARA

昨今、街中をスイスイと走るトラックレーサーをよく見かける。競技場内でのみ使用されるために作られた競技用の自転車が一般道を走る。実は私にとっては珍しくない光景である。競輪選手を含むトラックレースの選手もロード練習、あるいは街道練習といって一般道を走る。

ただ基本的には競技場内で走ることを目的にあらゆるものを排除している。反射板やブレーキさえもない。しかし、道路交通法違反なので一般道を走る際は簡易ブレーキを付ける。固定ギアのトラックレーサーはペダルを後ろに回せばバックできる、したがって前に回ろうとするペダルに抵抗すれば減速できる。ペダルの回転に疲れても後ろから押されるように足が回ってしまう。「送り」と言われるこのペダルの感触はロードレーサーでは決して味わえないし、長時間の停止も可能だ。こうした特徴が趣味としてトラックレーサーに乗る人たちを惹きつけているのだろう。

しかし、プロでさえ危険なのだ。数々の練習中の事故を見聞きしているから余計にぞっとする。ブームにのって楽しむ人たちは、止まらない・止めにくい乗り物で街に乗り出していることを自覚しているだろうか。フレームを販売するメーカーもブレーキの装着とヘルメットの着用を案内しているそうだが、格好の良いものとは言えないからきちんとしている人は多くない。競輪選手の動体視力と反射神経は常人とは違う。それでも事故はあるのだ。

最近耳にした、いい話もちょっと紹介しにくくなってしまう。競輪界の新時代を担う三重の柴崎淳選手は、10歳のときに父親に連れて行かれた競輪場で見たトラックレーサーにほれ込み、10歳にしてトラックレーサーを作ってもらい、乗り続けてきた。小さな頃から本物に触れることは大切。選手のエピソードとしては頼もしい。彼がロンドン五輪で大活躍してくれたらと願う反面、子供にトラックレーサーを与えるブームが起きたらどうしようと考えすぎてしまう今日この頃だ。

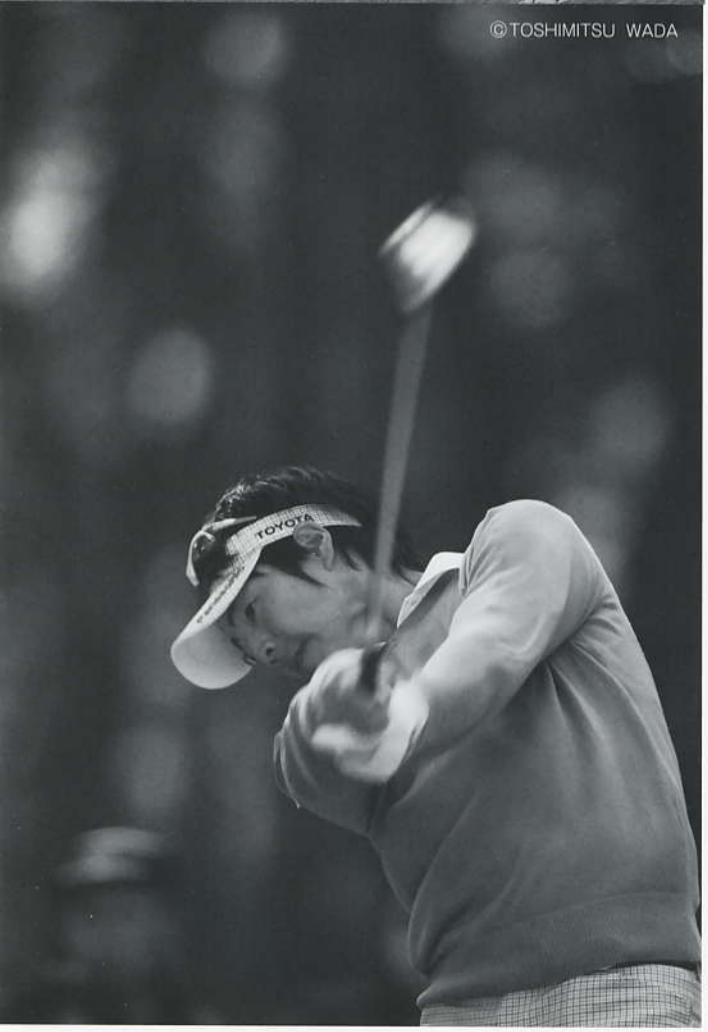
©YAZUKA WADA

©TOSHIMITSU WADA

1
3
2

1．ツール・ド・フランス
2．石川 遼
3．上田桃子

©TOSHIMITSU WADA



ゴルフ界を盛り上げる若い才能の活躍！

文／和田利光　Text：TOSHIMITSU WADA

日本・世界中が100年に一度の不況と言われている。そんな不況の嵐が各スポーツ界にも暗い陰を落としている。その影響を少なからず受けているゴルフトーナメント界。しかし、プロゴルフ界では明るいニュースも多く生まれている。

特に男子プロは、17歳の石川遼が出現したことで、日本中のゴルフ・ファンが彼のプレイに酔いしれている。その石川遼に世界のゴルフ界も注目し始めている。あのマスターズ委員会が彼の存在を認めて、2009年の『ＭａｓｔｅｒｓＴｏｕｎａｍｅｎｔ』への招待状を発送したのだ。この権威あるトーナメントに17歳の年齢で招待されるのは、まさに異例の出来事。それだけに世界のゴルフ界はT・ウッズ続く新たな才能として、若い石川遼に大きな期待を抱いていることがわかる。

日本では何十年に一人の才能といわれる石川遼。彼が世界の頂点に輝くあのT・ウッズと、世界のトーナメントで戦う姿が今年見られるかもしれない。それを想像するだけで、私たちゴルフ関係者も心が躍ってくる。

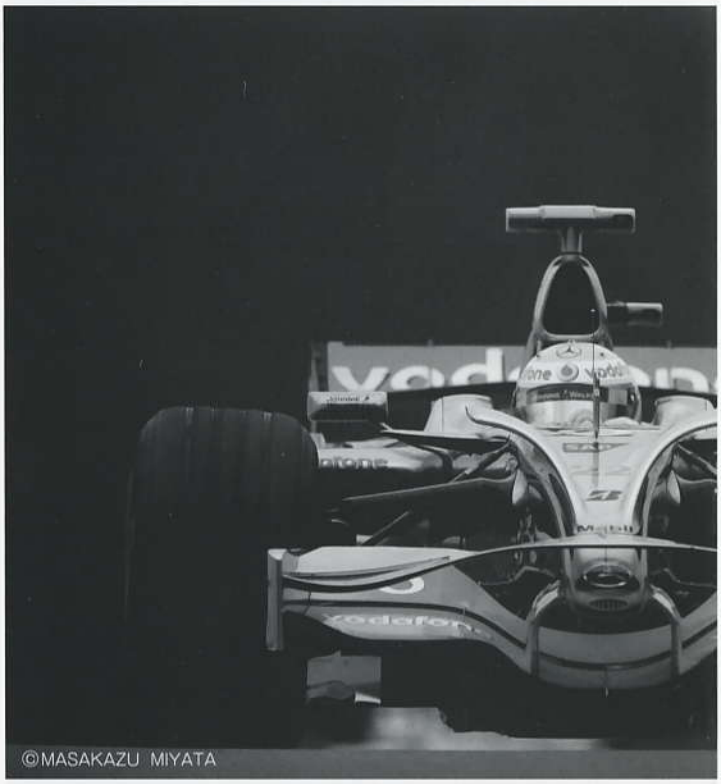
石川遼は年齢からは考えられない素晴らしい技術を持っている。それを支えるのが貪欲な研究心であり、日に日に進歩を見せている。これから石川遼は、その才能を大きく開花させていく可能性が高い。そして日本だけでなく世界のゴルフ界の中でスーパースターとしての地位を築き上げていくことも可能だ。

一方、日本の女子プロ界に目を向けると、宮里藍に続いて順調に若いプロたちが育っている。そして彼女らが各トーナメントで優勝争い、また優勝することで話題を盛り上げてきた。横峯さくらは日本のファンの前でトーナメントの中心となっている。また上田桃子は宮里の後を追い、戦いの場をＵＳＪＧＡ(米国)へと変えて活躍している。

2008年度賞金王になった古閑美保、原江理菜、三塚優子、若林舞衣子、諸見里しのぶと、女子ゴルフ界では数多くの若手プロが育ってきている。各スポーツ界でも若手が活躍して競技そのものの人気が高まるように、ゴルフ界も男女とも若いプロが順調に成長し、期待の持てる現状といえる。

速いクルマが格好いい

文／尾張正博　Text：MASAHIRO OWARI



「今年のマシンは外見が正直、変わっているよね。特に前後のウイング。でも、僕にはどうでもいいこと。だって、ドライバーにとってF1マシンで大切なことは、格好いいか悪いかではなくて、速いかどうかっていうことだから」

これは2005年と06年にワールドチャンピオンに輝いたフェルナンド・アロンソ（ルノー）が、09年型のニューマシンの発表会で語った言葉である。短いコメントだが、そこにモータースポーツの真理が隠されているように思う。

F1は09年、クルマを製造するための技術的なレギュレーションが大きく変更され、外見が08年までとは変貌したマシンが次々と現れた。加速するコーナーリングスピードを抑制するために06年比で約50%ものダウンフォースを削減し、かつオーバーテイクを増加させるためにブレーキング時の安定を図る方向で変更がなされた技術改訂の結果、フロントウイングは異様に幅広くなって、まるでモップのような体を成し、リアウイングは左右が縮小されただけでなく高く追り上がって、およそ世界最高峰のフォーミュラーカーとしての迫力は伝わってこないルックスに変身した。しかし、元チャンピオンは「決められた規則（フォーミュラ）の中で速ければ、見た目はどうでもいい」というのである。

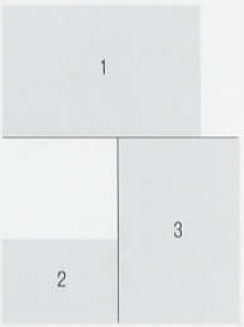
モータースポーツの世界には、こんな言葉がある。

「速いクルマが格好いい」

1990年代前半に登場したハイノーズも、98年に採用された溝付きタイヤも、当初は外見的な面で酷評されたものである。しかし、ハイノーズは、その空力的な優位性から現在では当たり前にどのチームも採用しているし、11年間に渡ってF1で活躍し続けた溝付きタイヤも、最後の年となった08年にはすっかり「F1＝溝付きタイヤ」というほど、この世界でしっかりとした地位を確立していたように思う。

09年最初の走行となったポルトガルのアルガルベ・サーキットで行われた合同テスト。08年型マシンと混走する09年のニューマシンが叩き出したラップタイムには、早くも08年型マシンと肉薄するものがあった。ニューマシンはシェイクダウンしたばかりだから、いずれ09年型マシンが昨年のラップタイムを更新する日が来ることは間違いないだろう。そして、その時こそ、この09年型のF1マシンが格好良く見え始めるという瞬間ではないだろうか。

F1がF1じゃなくなると心配されたシーズンオフ。しかし、技術の進化は人々の想像を超え、新たな時代へ私たちを導こうとしている。



1．マクラーレン・メルセデス／ルイス・ハミルトン
2.3．フリースタイルスキー モーグル、上村愛子

上村愛子、女王としてのシーズン開幕

文 / 矢田部 裕　Text : HIROSHI YATABE

2008年12月、FISフリースタイルスキーモーグルのワールドカップ初戦、フランス、メリベル。07-08シーズンを総合優勝という最高の形で締めくくった上村愛子は、その証としてのイエロービブを身にまとい、ここメリベルでの開幕を迎えた。

総合優勝後の初めてのオフシーズンをおごることなくトレーニングに費やし、さらに理想の滑りに近づくために体幹の強化を果たした上村愛子は、シーズン開幕直前のフィンランド合宿を万全の形で終えてメリベルに乗り込んだ。この大会には先シーズンを怪我で見送った元女王、カナダのジェニファー・ハイルが出場するが、前日の公式トレーニングでは全くその片鱗を見せることなくトリノ・オリンピック、ゴールドメダリストとしての威光は陰を潜めていた。対象的に上村愛子は直前合宿の好調さを維持しつつ、さらに進化を遂げるかのような滑りとエアで光輝いて見えるようだった。

今大会はデュアルモーグルのため、予選を勝ち進んだ上位8選手によって二人同時に滑る決勝トーナメントが行われる。ワールドカップ6連勝のかかった上村愛子は予選を5位で無難に通過したが、決勝戦でいきなりジェニファー・ハイルと当たることになった。

新旧女王対決。それは、たぶん、二人ともお互いにいきなり当たりたくない相手だったんじゃないか。と、そんな風に思ってはみたものの、公式トレーニングでの雰囲気からも上村愛子の勝利は間違いないように思われた。

そして、決勝。第一エアの着地が少し乱れた上村愛子はその後もスピードに乗れず、さらに第二エアも精彩を欠き一回戦敗退。その後ジェニファー・ハイルは勝ち上がり、決勝でハナ・カーニーに破れるも2位。元女王の貫禄を見せた。

上村愛子は、前日の公式トレーニング後「正直ここで絶対勝てるとは思わない。いつもシーズン序盤は良くない」とはコメントしていた。が、しかし、好調なスタートを切ったこのシーズン、彼女の言葉とは裏腹に、ワールドカップ第2戦カナダのモンガブリエル大会において、彼女は優勝を飾ることになる。

今シーズンは、福島県猪苗代においてFISフリースタイルスキー世界選手権猪苗代大会が3月に行われる。上村愛子にとって、いままでのどのシーズンよりも好調な滑り出しを見せたこのシーズンが、世界選手権での金メダルとなって結実することを心より願ってやまない。

©HIROSHI YATABE

“その時”と巡り会う至福

文／田中宣明　Text：NOBUAKI TANAKA

1．スピードスケート、加藤条治
2．期待のかかるフィギュアスケート陣

スケート界ではじめてメダルを獲得したのは、スピードの北沢欣浩。男子500m、銀メダルだった。1984年のサラエボ大会のことである。

そして、前回トリノ大会での荒川静香とイナバウアー。記憶に新しく、まだ私たちの脳裏に焼き付いているが、早あと1年足らずで、冬季オリンピックがカナダのバンクーバーで開催される。4年という歳月は早いものである。選手皆の夢が集結する時がまたやってくるのである。

選手の究極の目標は一番になることだろう。究極の夢はオリンピックでの金メダルだと思う。スポーツは勝負をし、順位を決めるものだ。もちろん勝者は称えられ、人々の記憶に残っていく。しかし、敗者がいるからこそ勝者がより輝くのは間違いない。結果的に順位はあっても、皆、選ばれし者たちだ。努力を惜しまず一生懸命に闘う者たち。この者たちの一人でも蔑むことは罷りならない。すべての選手が光輝く存在なのである。

私たちの仕事は、そんな選手たちを、その者たちの闘いを記録し、伝え、叶うるならば人に記憶してもらえるものを残すことだ。そのためにはやはり、選手の喜怒哀楽こそが、絵になる絶好の対象となるのである。であるから、私たちは常に素晴らしいシーンに出会うことをいつも願ってやまない。カメラマンは、その二度と出会えないシーン、“その時”をただ待つのみである。“その時”を待つドキドキと、撮り逃してはいけないという緊張感で包まれる時間を、いとおしく思えるに違いない。私たちにとっても、“その時”は二度とやってこないのだから。

勝者のガッツポーズ、敗者が天を仰ぐ姿、そして涙。私たちの欲望を満たしてくれるに足りる被写体がそこにはある。そして私たちの望みを叶えてくれるであろう選手がそこにはいるのである。

ショートトラック、スピードスケート、フィギュアスケート。日本には名だたる選手が大勢いる。皆、可能性を秘めた闘う者たちだ。だれがオリンピックに行くことができ、そこで活躍できるかもわからない。笑うものもいれば泣くものもいるだろう。そんな選手たちを傍らで見ながらも、私は、ただエールを送ることしかできない。本当は、みんなの笑顔を見たいのだから。

©NOBUAKI TANAKA

アスリートの選手寿命が延びている

文／元川悦子　Text：ETSUKO MOTOKAWA

石川遼や錦織圭など10代アスリートの活躍が目覚しい昨今だが、ベテラン選手も頑張っている。40代後半に差し掛かったプロ野球の工藤公康（横浜=46歳）を筆頭に、サッカーの三浦知良（横浜FC=42歳）、中山雅史（磐田=41歳）ら40代選手が依然、トップレベルのパフォーマンスを維持している。女性アスリートにしても、昨年に電撃的な復活を果たしたテニスのクルム伊達公子（38歳）、マラソンランナーの弘山晴美（40歳）、スピードスケートの岡崎朋美（37歳）ら、30代後半以上で実績を残し続ける選手は少なくない。

年齢を重ねてもなお、第一線で活躍し続けられるのは、徹底した肉体管理の賜物だろう。カズも若い頃と同じように、一番にトレーニング場に現れ、練習後は入念に体のケアをし、食生活にも細心の注意を払っているという。派手な印象の強い彼だが、普段の生活はサッカー第一。彼のプロ意識の高さには、朴智星（マンチェスター・ユナイテッド）、松井大輔（サンテティエンヌ）、播戸竜二（G大阪）らも「大いに衝撃を受けた」と発言している。

競技生活にまい進できるストイックさ、強靭なメンタリティを備えていることも、選手寿命を延ばす大きなポイントだろう。人間、年を取り、体が思うように動かなくなると、高い目標を追い求めることができなくなってくる。理想と現実の乖離に悩み、引退という決断を下すケースも多いだろう。だが、工藤やカズらはそのギャップを最小限にとどめ、強い精神力で自らを奮い立たせている。そのタフさは尊敬に値する。

女性アスリートの場合は周囲の協力による部分も大だ。伊達は夫のレーシングドライバー、ミハイル・クルム氏の「もう一度やってみたら」という言葉が現役復帰を決意させたという。先日、引退を発表したが、弘山も夫の勉コーチとの二人三脚で40歳までマラソンを走ることができた。岡崎も2007年11月に結婚した後も夫とは別居しながら競技生活に全力を注いでいる。彼女らのように環境が整わなければ、アスリートとしてトップに立ち続けることはできない。そのあたりが改善されてきたことも、ベテランの女性競技者が増えてきた一因ではないだろうか。

40歳前後になってもなおトップで走り続けるベテランアスリートの姿に勇気づけられる人も多いはず。彼らにはまだまだ粘り続けてほしいものだ。

編集後記

AJPS マガジン編集長　岩﨑龍一

酒場の片隅にいて、聞こえてくる話に耳を傾ける。そのなかに、よく聞くフレーズがある。僕より一回りぐらい年上の年代の人たちだろうか。

「東京オリンピックが昭和39年だったから、俺が何歳の頃……」

およそ半世紀前に開催されたアジア初のオリンピックは、高度経済成長を続ける日本の活力の象徴だったのだろう。東海道新幹線が開通し、高速道路が建設されるなど、経済面でも日本全国に大きな効果をもたらした。さらに国民、特に将来のある子供たちにスポーツを通して希望と勇気を与えた。

しかし、あの大会から50年弱近くが経つ現在、僕が思う東京五輪の一番の遺産は、酒場で杯を傾けるオジサンたちが、いまだに"昭和39年"もしくは"1964年"というその年を、自分の人生のカレンダーの中で特別な基準の年として記憶していることだ。

2016年、東京は2度目の夏季オリンピックの開催を目指して招致活動を行っている。もし実現すれば、閉塞感に喘ぐ日本の中の数少ない、だが多大なパワーを秘めた光明になるに違いない。でも状況はいずれ変わる。そんな中で僕は思う。本当に小さな形でもいい。50年後に「2016年の東京オリンピックが……」と、それぞれが人生のカレンダーの節目としてこの年を記憶できるのであれば。それは恐らく、日本にとどまらず「TOKYO2016」として海外の人々の記憶にも刻まれるはずだから。

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE
AJPS Magazine 2008-2009

編集・発行人　水谷章人
編集スタッフ　岩﨑龍一、飯塚健司
小永吉陽子、吉田かおり
山城 敬
フォトエディター　坂本 清、加藤誠夫
デザイン　アトリエ[アール]伊藤理佳
印　刷　株式会社 販究

AJPSマガジン 26
MARCH 25 2009

編集・発行所　日本スポーツプレス協会
(AJPS)
〒112-0013
東京都文京区音羽1-21-10
関根ビル603
TEL./FAX.03-3946-9033
Web http://www.ajps.jp

※本誌掲載記事、写真を無断で転載することはできません。

AJPSがお伝えするスポーツ情報が満載！

ホームページもご活用ください。

http://www.ajps.jp

2009年2月現在、AJPSにはカメラマン、ジャーナリストを合わせて149名が所属しています。国内、国外のスポーツ現場で取材を続ける会員の最新情報をお伝えするのが「AJPSホームページ」です。会員が開催する展覧会や写真集&書籍の出版情報はもちろん、各競技のスケジュールも網羅しています。ぜひホームページをご活用ください。

AJPS sports photo gallery

最新競技の結果を数枚の写真とともにお伝えする大好評のフォト・ギャラリーです。

取材現場レポート

世界中のスポーツ取材現場からホットな話題やちょっとした裏話を紹介します。

週刊スポーツコラム

ジャーナリスト会員が身近で起きたスポーツに関する話題を個性豊かにお伝えするコラムです。

Locker room

AJPS に設けられた各競技部会が最新情報&活動報告を定期的にレポートします。

展覧会出版情報

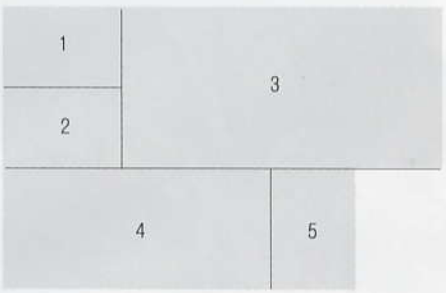
AJPS会員が開催する展覧会や写真集&書籍などの出版情報を紹介しています。

AJPS会員は世界を舞台に

活動しています。

©KAZUYOSHI SHIMIZU

©YOSHIO KATO



1. FIFA フットサルワールドカップ ブラジル 2008 ／ブラジルvs.ロシア
2. NHL ／カルガリー・フレームスvs.バンクーバー・カナックス
3. UEFA EURO 2008 ／スペイン
4. MLB 松井秀喜／ニューヨーク・ヤンキース
5. WNBA ダイアナ・タウラジ／フェニックス・マーキュリー

表4／写真 上から

1. マイケル・フェルプス ©TSUTOMU KISHIMOTO
2. 吉田沙保里 ©DAIJU KITAMURA
3. ウサイン・ボルト ©TSUTOMU KISHIMOTO
4. ソフトボール／日本 ©MASAKAZU WATANABE
5. 体操／日本男子団体 ©TSUTOMU KISHIMOTO

Canon

HCL
HORIUCHI COLOR LTD.

FUJIFILM

Nikon

OLYMPUS

PENTAX

フレームマン

IMAGINE

IMAGINE Art Planning

TOKYO
VISUAL
ARTS

ユニバーサルカラー

富士フイルム イメージテック株式会社

アサヒカメラ

ASSOCIATION
JAPON DE LA
PRESSE
SPORTIVE

日本スポーツプレス協会